

古代吉備国を語る会で 鬼ノ城周辺を探訪

会員 矢吹壽年

吉備国に築かれた三個の山城。備前・備中・備後に残るこの山城のうち、備後国の常城（つねき）のみは発掘に至っていない。ここで参加者の中から、最近の新聞等で発表のあった鬼ノ城発掘の調査報告の判断に疑問がだされた。

それまでの報告や発掘に携わった村上氏、葛原氏の著書をもて、「この鬼ノ城遺跡が巨大な古代の軍事施設であり、日本書紀に 663 年に白村江（はくすきのえ）の大敗を受けて、664 年 5 月に唐の百済鎮将、劉仁願（りゅう・じんがん）の使者訪来に接し、対馬・壱岐・筑紫に防人（さきもり）と烽火（のろし）を置き筑紫に大堤を築き、水を貯えて水城（みずき）と云った」と載せている。唐と新羅の連合軍を相手に、戦争が起こるかも知れない危機に立たされたのだ。戦勝の威を着た唐将が「落とし前」を要求したと観るのが妥当であろう。

その後の百済は唐の將軍により、戦勝記念碑を建立される。その屈辱感は今現在の平和と統きの日本人には解るまい。国境警備軍や烽火は朝鮮にも常設されていて、唐勢力の高句麗や百済侵攻に備えていたようだから、これはこの時即時に整備された。

敗戦に臨んで唐羅連合軍の進入を、瀬戸内海航路と意識したのも、当時のアジア圏の戦力・軍力・軍事能力を把握していた結果としたい。我が国では西海防備の名目で、滅亡の百済から渡来していた百済の達卒（たるそつ）なども動員して、長門の国や筑紫の国に山城を築かせている。その他、畿内の高安城、讃岐の国に屋島城、対馬の国に金田城などを築いている。（天智天皇 3 年から 7 年まで 4 年間で

完成か）書紀に載せてある城は日本（韓国の三国史記に、670 改号と記す）の国営の施設施工である。

そこで、吉備の三城はというと、後の備前分（吉備国は天武天皇の 12 年頃、前・中・後に分国となった、683）に残る、大廻り小廻り（おおめぐり・こめぐり）山の山城遺跡であるが、ここは吉備の上道氏（かむつみちし）の勢力地域。（中彦命の兄・多佐臣を上道国造に定め賜うと国造本紀にある）

鬼ノ城は後の備中の国賀夜（賀陽）郡に属し上道氏の一族賀陽氏の勢力地域（上道国造の同祖、中彦の命を賀夜国造に定め賜う）

常城（つねき）は備後品治郡（多遲麻君の同祖若角城の三世の孫、大船足尼を吉備の風治の国造に定め賜う）当て字もあり、振り当てるルビがなければ、読み辛（つら）く理解しにくいかも知れない。

今回の鬼ノ城の報道による築城年代は礎石建物群、鍛冶工房跡などや、須恵器の編年に拠ったようだが、壬申の乱（672）後の天武・持統期に下ると紹介されている。この判断は、妥当うでないと仲間で言い合った。これだけ大規模な軍事施設が吉備にできて、国営施工ならば当然記紀に記すべき大事業であろう。記録されていないなら吉備国に要請なり、命令なりで築いたであろう、これも当然記載されても良い。もし、中央の意志でない軍事施設であれば、中央政権は何故謀反と考えなかったのか。これは変だと話し合った。

壬申の乱以後のこの地域にこれだけの嚴重な規模・構造を必用とする危機がどこにあったのか。そう考えないのは不思議である。

その後、石川王が吉備大宰（きびのおおみこともち）として赴任し、多数に惜しまれつつ病没する（天武天皇 8 年 679 年頃）。天武天皇の 13 年頃、吉備国は、道の前・道の中・道の後に分けられる。書紀のこの記載の仕方も弱い。

和銅6年(713)備前の国を分けて美作の国を設置することになる。全国の中で四ヶ国に分置されたのは吉備だけである。それに増して、播磨国風土記の記録によると、吉備大宰の頃に、播磨をも管轄地としていたことを思わせる記載があるという。

鬼ノ城の築造は当初の通り、百済と羅唐連合軍の戦後とするのが妥当で、以後備中の国の健児団(こんでいだん・備中国軍)の基地として利用し、天武・持統朝まで使用されたとするのが妥当か。当時一斉に築城したために、設計施工する技術者が不足し、居なかったのは書紀を読んでも解かる。

壬申の乱の勃発に際し、樟使主磐手(くすのおみいわて)を吉備国に遣わして、軍兵をことごとく徴発させたとき、吉備の国守、当麻公広島が、大皇弟と親しかつたとして謀殺された舞台だったと指摘したい。もし鬼ノ城を根城に抵抗され、時間をかければ反対勢力を助長させる危機を感じていたから起こった謀殺であろう。周囲の土塁に沿った内側の石畳を見れば、兵卒達は、統一した軍靴を着装していたであろうと、推定することが出来るし、鎧兜で整備された軍隊であったと思われる。鬼ノ城に佇んでみて、吉備氏の面目躍如と話あった。本当に歴史は面白い。

賀夜氏(後の賀陽氏)と一族が設計施工した山城が完成した。他の国営事業で完成したものと、何ら劣ることなく、いや優るとも劣らぬ施設(鬼ノ城)を中央へ提供すると、褒美はどうだろう。家系は吉備上道氏の公称と吉備津彦陵の祭祀権、津宇郡であった吉備中山を賀夜郡に編入、戦後の多忙もあったろう。直ぐには発令されていない。協力した下道氏も、やがて中央へ招かれ、吉備真備が活躍することとなる。

歴史って本当に面白い。

イタリア 1300 年 紀行

会員 濱手英之

ベローナ

平成26年2月に入って、急遽イタリアに行くことになった。3度目とはいえ、イタリア語はまったく分からない。まあ、なんとかやるかと覚悟を決め、飛行機をネットで予約し、その時勧められたレンタカーが5日で110ユーロと安かったので今回は車を使うことにする。クルマはフィアットの500という1200ccの小型車だが、リクエスト欄にナビを書いておいたので、ナビさえあればどうにでもなると思っていた。

ベネチアのマルコポーロ空港に着き、車を受け取る。ホテルと、今回の目的地、ベローナは130kmほど離れた場所にあるので、最終日にでもベネチアは行こうと誓う。で、レンタカーの申込書(英語)を見ていて気付く。GPS(ナビ)が無いことに署名させようと言われていた。窓口に言っても、「ない!!」の一点張り。

I need a map!!!

と大きめの声で伝えると、Ok, ok, ok・・・と30秒程で、130kmは離れたベローナまでの道のりを教えてくれた。また、日本の高速道路でいただける地図の半分ほどのサイズの地図ももらう。出だしから、躓きかけた。



仕事仲間との交流

今回は、仕事がらみではあるが、2日は、自由行動できそうだ。最初に、やるべきことをこなし、21日に、フィレンチェとピサを目指してみる。ちなみに、このころオリンピックで超盛り上がっているところではないかと思うのだが、時差の関係か、夜テレビを見てもオリンピックはやっていない。3日目位に存在することに気付いたBBC放送にイタリアのフィギュア選手が少し映っただけである。真央ちゃんが見えなくて残念・・・

フィレンチェ



ドゥオモの天井画

フィレンチェでは、行ってみたかったドゥオモ(サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂)に直行。ゴシック様式では世界第三位の規模らしい。私の見たかったのは、ドームの裏の天井壁画？ これは、何とも素晴らしい！！のだが、天井が高いため、遠目に見ることになる。視力がもっとよかったら、3倍は感動したことだろう。ドゥオモ内を見ている



ドゥオモの地下

と地下に続く階段を見つける。降りてみると、売店と、有料の展示スペースがある。10ユーロ(約1400円)ととっても高いのだが、旅先では迷ったら見る！を心掛けているので、入ってしまう。天井は低めで古代？の遺跡がある。ヨーロッパは攻めたり攻められたりを繰り返しているの地下が発達しているようだ。ここも、戦時には、皆で隠れたり、集まったりしていたのだろう。(写真参照)

フィレンチェもだが、ヨーロッパの旧市街は迷路のように作られている。日本でも古い町には荒神曲りがあったり、姫路城のように、わざと偽の道を作っておいたりしている。



旧市街地の道は判りにくい

ということで、道は緩やかに曲がり、交差点は90°ではないところが多い。ナビは無く、天気は曇りで太陽も見えない。フィレンチェは運よく比較的素早く出入りできたのだが、ピサ旧市街とペローナ旧市街ではかなり迷ってしまった。地元の人等慣れた人なら問題ないだろうが、初めての人間にはつらいつくりである。長らく、侵入者に対する警戒心があっただろうと思われるので、町のつくりだけでなく、行き先表示など道路表示も日本に比べて極端に少ない。空港や、大都市の方向は出ているのだがそれ以外は最小限以下と思う。日本が至れりつくせりと感じる。

途中、7～8 人に道を聞いたのだが、私はイタリア人を見直しました。皆が、真剣に一生懸命考えて教えてくれるのだ。旧市街では特に答えるのも難しいだろうが、最後に力になれなくて申し訳ないとお詫びまでしてくれる。まじめで純情な？人柄が伝わってくる。

水の都ベネチア



ベネチアは若者で大賑わい

最後に行った水の都ベネチアは、一度は行ってみたかったところである。地図で見ると、離れた島まで橋が架かっている。ネットが思ったように繋がらず、詳細が分からないがとりあえず行ってみる。橋を渡り、すぐに大きなパーキングを見つける。3 分ほど並んですぐに入れる。料金は高そうだが、長居はしないのでこれは便利だ。初めてのベネチアはまさしく迷路。地図があっても迷うだろう。しかし、若者を中心にすごい人出で楽しい。

寒くて小雨の降りそうな日であり、一人ではゴンドラに乗る気もしない。よく見ると自警団？の人たちが多くいる。事件も多いのだろう。しかし観光客の多さは驚きだ。聞くと、翌日天使？が空から降ってくるらしい。これでも人出は少なかったようだ。観光地として、ベネチアには学ぶべきところが大変多いと

感じた。海面上昇で沈んでしまうということのも大きな PR になったであろう。



西洋風鳥居と狛犬が珍しい



有名なピサの斜塔

今回見えたイタリアの旧市街地等は、ガイドもなく、下調べもなかったのでピサの斜塔等有名な場所が中心になってしまった。しかし、快適な気候の下、イタリア製の小型車で走り回った約 1300km は忘れられない思い出となった。ドゥオモの天井画等 20 年も前から見たかったものが見えて満足である。今後とも「チャンスは掴む」をモットーにいろんなものを歴史を感じながら見てみたい。

26. 03. 03

中尾・大膳池 製鉄遺跡発見

報告書

会員 中西厚 丸谷憲二

1 はじめに

たたら研究会・平成 25 年度岡山大会(平成 25 年 12 月 7 日)に参加しました。発表内容は「吉備地方における最新の鉄・鉄器生産研究」でした。上梅武氏「弥生時代吉備の鉄器生産」に続いて岡山県古代吉備文化財センターの氏平昭則氏、杉山一雄氏、金田善敬氏の発表がありました。中西厚氏も参加されていました。

中西厚氏から「30 年前に発見している製鉄遺跡を探しに行きましょう」との誘いを受けて、二人で「中尾・大膳池製鉄遺跡」を 12 月 12 日に現地確認しました。

2 中尾・大膳池製鉄遺跡の発見場所

中尾地区に製鉄遺跡の発見報告はありません。製鉄遺跡発見場所は▽印の近くです。現在、萬浦池の護岸工事のために池の水抜き作業をしています。水抜き作業により水面が低下し製鉄遺跡が現れました。普段は見ることはできません。



上道老人ホームの南から中尾集落の東付近。北へ入り込む谷の谷奥に広がる緩斜面上に広い範囲で埋蔵文化財散布が報告されています。大膳池左側の枠内は埋蔵文化財の散布地です。発見された主な出土品は須恵器・備前焼・陶器です。主な時代は古墳、飛鳥、白鳳奈良、平安、鎌倉、室町、安土、桃山、江戸時代です。出土品は岡山県古代吉備文化財センターに保管されています。

3 大膳池製鉄遺跡の発見時の写真



萬浦池の護岸工事 池の水抜き作業

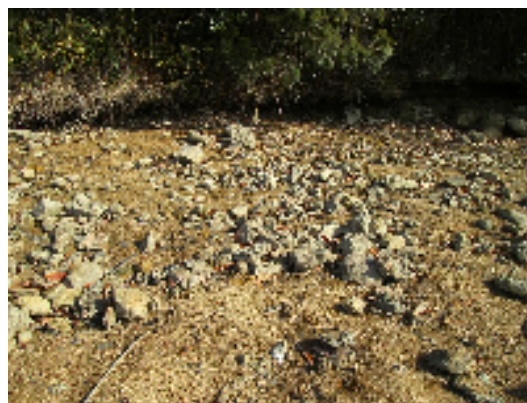


埋蔵文化財発見場所





大膳池の水位低下により、製鉄遺跡を側面から観察可能となる。磁石にて確認



磁石にて確認



周辺に鉄滓 (スラッグ) が散布している。磁石にて確認



炉壁・確認



鉄鉱石を磁石にて確認・須恵器片を発見



鉄滓 (スラッグ)

形状の丸みから銅

(けら・出来上がった製品)か。

4 まとめ

製鉄遺跡を側面から観察できることが、中尾・大膳池製鉄遺跡の最大の価値だと考えます。鉄鉱石・鉄滓(スラッグ)・鋤・炉壁・須恵器片を発見しました。備前国の製鉄は砂鉄以前に鉄鉱石を原料として使用していました。

中西厚氏の「岡山市教育委員会文化財課 乗岡実先生へ調査保存を申入れてみては如何でしょう。文化財課がどのように判断して対応するか。史跡の調査は専門家にまかせましょう。」との所見により、平成 25 年 12 月 14 日に高橋伸二先生に製鉄遺跡発見を報告しました。中尾・大膳池製鉄遺跡 発見報告書を提出させていただきます。

5 追記

5.1 発見した須恵器は古墳時代と推定されます。発見したのは鉄鉱石であり、磁鉄鉱ではありません。(山本原也先生 岡山県古代吉備文化財センター 平成 26 年 1 月 15 日)

5.2 小字地名 「カナクソ」

地元中尾の難波靖夫氏に確認したところ、上の山の小字地名は「カナクソ」です。調査は行われていないとのことです。角川地名辞典にて「金クソ」の地名を確認しました。「金クソ」とは鉄滓の通称です。

草ヶ部 法追(ホウエ) 貝層の

現状報告

会員 中西厚 丸谷憲二

1 はじめに

吉井川右岸の貝塚の現状を調査していて、草ヶ部の法追(ホウエ)貝層を知りました。平成 25 年 12 月 20 日に草ヶ部の法追(ホウエ)貝層を中西厚氏に案内していただきました。

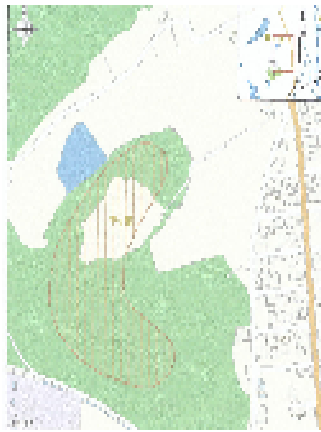
2 草ヶ部 法追(ホウエ) 貝層の現状

中西厚氏の著書「ふるさと再発見 草ヶ部の物語」に「草ヶ部 法追谷の南面の竹藪の中に、かつて葡萄を運搬するテラーの道を広げた時に切り取ったと思われる斜面に直径 2cm 位の巻貝の白い殻が散乱していました。この巻貝が貝塚の貝だとすれば、さらに古代の貝塚遺跡かもしれません。」と記録されています。上道変電所の近くです。

法追貝層は 60 年前にブドウ畑の開墾中に発見され、地元では貝塚と伝承されています。沼の貝塚が再調査されていた頃と思われます。小学生が小学校に持って行ったが、「貝塚とは認めてもらえなかった」という証言が残っています。法追貝層の標高は沼貝塚より 5~10m 高く 10~15m です。



発見場所付近



法追貝塚⇒表示

3 草ヶ部 法追(ホウエ) 貝層・調査報告

竹藪の中を 50m 程入った斜面に貝層があります。同一種類の巻貝が層になっています。貝塚では無くて「水面が下がり巻貝が層に残った」可能性があります。貝層です。見つかったのは川の貝です。50 年前に小学生が小学校に持って行ったが、貝塚とは認めてもらえなかった。その女性石原さんが 50 年ぶりに昔を思い出して案内してくれました。「専門の先生に現地を見てもらいたい。貝塚なのか。水面低下は何時の時代か。巻貝の種類は何か。教えてほしい」と頼まれました。岡山県農林水産総合センター水産研究所を平成 25 年 12 月 25 日に訪問し、村山史康先生(開発利用室 技師)に鑑定を依頼しました。「古い貝殻を見るのは初めて」とのことでした。3 冊の貝類辞典にて、海の貝から調査に入り、最終的に川の貝であるマルタニシとの鑑定でした。マルタニシはたにし科です。食用のたにしです。マルタニシは殻の縁が角ばっていないのが特長です。他にマイマイの仲間も見つかりました。川の貝層の可能性あります。



写真説明を入れてください



竹藪の中を 50m 程入った斜面に貝層



同一種類の巻貝が層



たにし科マルタニシ



採取したマルタニシと須恵器片

4 まとめ

- ① 法迫貝層から川の貝であるマルタニシが発見されました。食用のたにしです。

畑山智史氏の「犬島貝塚から出土した動物生息域」にマルタニシが記録されています。

マルタニシは広島県尾道市の大田貝塚出土貝類一覧と備後地方縄文貝塚出土貝類一覧表に記録されています。松永湾の東湾に位置する馬取西貝塚でも記録されています。

- ② マルタニシは甲野勇氏(大山史前学研究所)の、1928年6月『史前学研究会小報・第二号』『埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告』に「縄文時代後期末・晩期」と記録されています。晩期とは約 3,300 ～ 2,800 年前です。1950～1954 年に発掘された滋賀県大津市寺辺町石山貝塚と同様の日本では例の少ない内陸部の淡水区域貝塚と推定されます。

表1 岩槻付近の貝塚出土貝種名一覧表
(甲野勇「真福寺貝塚調査報告」第4表を改訂)

地名	後期末・晩期	前期諸磯式	前期黒浜式	前期諸磯式	中期藤坂式	前期黒浜式	前期関山式
種名	真福寺	小戸	深作	柏崎	崎浮	谷黒	谷本 曾良
ニッポンシジミ	◎	◎					
ヤマトシジミ	◎	◎			◎		
ハマダケリ	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎
オノガイ	○			◎	◎	◎	◎
ハイル	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
サボウ			◎	◎	◎	◎	◎
アサリ		○	◎	◎	◎	◎	◎
シオフキ			○	○	◎	◎	◎
オキシジミ		○	◎	◎	◎	◎	◎
マガキ		◎	◎	◎	◎	◎	◎
イタボガキ				◎	◎	◎	◎
アカニシ			○	○	○		
オオタニシ	◎					◎	◎
マルタニシ	◎						
カワナ	○						
ナメノカワナ	○						

『日本における貝塚研究の歴史 1877 年～1970 年代』

江坂輝弥 収録

- ③マルタニシは縄文時代から現在迄も行き続けている貝です。貝塚の年代が重要です。

平成 26 年 1 月 15 日に小野伸氏に採取したマルタニシの現物を見ていただきました。

「このマルタニシは新しい、縄文時代ではい。年代測定は同時に発見している土器の年代を専門家に鑑定してもらうように」との教示を受けました。

④長谷川一英先生(岡山市埋蔵文化財センター所長)の所見は、「応仁の乱(1467 年)～江戸時代」でした。「貝塚では無くて貝層と考える。マルタニシに食べた後が残っていればゴミ捨て場である。現在は竹藪であっても中世から近世の住居跡が近くにあるかもしれない。」同時に研究手法として「落ちているものを拾うのは良い。しかし、発掘は法に抵触する場合がある。」「関係機関に発見を報告するように」との教示を受けました。

- ⑤法迫貝層のマルタニシは内陸部の淡水区域の貝です。竹原貝塚でのマガキの発見により、吉井川の中州と瀬戸内海は何処で分離されるのかとの設問に対する解答として、法迫貝層の重要性が確認されました。①～⑤はより海水の多い貝塚を①としました。

吉井川の中州と瀬戸内海は何処で分離されるのか			
貝塚名称	発見した貝の名称	淡水・汽水・海水に生息する貝類の分類	発見した貝塚の年代
法迫貝層	マルタニシ	淡水⑤	戦国時代～江戸時代

平成 26 年 1 月 15 日

編者 「マルタニシ」が「丸谷」と発音が一致している偶然に何かを感じます。

私考 熊山遺跡について

会員 井上秀男

1. 熊山遺跡の概要

赤磐市奥吉原の熊山山頂（508m）に石積みで作られた平面方形4段層塔があり、通称熊山遺跡と呼ばれている。1956年（昭和31年）に、国の史跡指定を受けて遺跡の調査が行われ、1974年3月に報告書が作られている。



熊山遺跡(先史古代研究会のHPより)

その後この熊山遺跡についての諸説なるものが論じられ、戒壇説・経塚説・墳墓説・仏塔説等が検討されてきた中で、現在では仏塔説が有力な見解である。（各説の紹介は当会＝先史古代研究会のHPを参照）

今まで熊山遺跡の解明に、各種のシンポジウムや諸先生の講演会が開催され、中には韓国の山清・安東・義城に、熊山遺跡と類似している石積遺跡の研修旅行が企画され、『韓国研修旅行報告書』も作られている。

また国内で熊山遺跡に類似している、奈良市高畑町の頭塔と大阪府堺市土塔町の研修旅行が実施され、私も参加したのですが、これらの頭塔については、誰が何の目的で造立されたのか文献に残っていますが、熊山遺跡の場合には、文献資料が無い謎の遺跡です。

私はどのような時代の経緯を経て築造されたのか、仮説として各項目を設けて熊山遺跡について、私なりの私考を試みます。

2 熊山山頂に磐座が存在していたか

弥生時代になると稲作が各地に広がって農耕文化を中心として集落ができて、人口も増えると、食料確保が重要になります。稲作するには水と太陽の恵みが大切で、稲作の始まった頃は、平地ではなく山間部の狭い谷を利用しての稲作でした。高い山に雨が降り山からの水の恵みを受けることで、山に神が宿り巨石にも神が宿ると信じた古代の人は、自分たちの住む場所の高い山を、神奈備山と称して、大きな巨石を磐座として拝んで、稲の豊作を祈っていたと考えられている。

熊山は標高 508mで熊山周辺の山塊には磐座が存在している。例えば和気郡和気町衣笠の入田山の山頂の磐座、和気郡佐伯町加三方の金子山の立石、和気町本のイモリ岩等がある。

熊山遺跡のある山裾の千駄猿喰地区に居た弥生の人々は熊山を神の「宿る山」として磐座を拝していたと思う。その後集落ができ支配者が生まれ、この集落の長（おさ）が死亡すると埋葬する墳墓が築かれる次の時代に入る。古墳時代になると、それまで（弥生時代末期）巨石（磐座）や神聖なる山を神として祀っていたのが、集落の族長の埋葬には古墳を作って、人格神として祭祀するように変化してくる。

古墳も大小・形式・種類もある。良く知られている前方後円墳・円墳・墳丘墓・積石塚古墳などがある。熊山遺跡の近くの干射地区に、5世紀頃の前方向後円墳の武宮古墳があり、明神山古墳群、矢部古墳群がある。武宮古墳は吉井川流域の砂鉄・銅・鉄の精錬を行っていた、和気氏に関係する古墳であろうとされている。

これだけ古墳が有ることは、熊山遺跡の周辺に人々が多く居住していた証拠であり、稲作をするのに豊作を祈った磐座が有ったと思われる。

3. 岡山の積石塚古墳と熊山遺跡

熊山遺跡の場所に磐座があり、弥生時代には神の祭祀の場所として存在していたが、古墳時代になって、山頂の磐座を崩して積石塚古墳が築かれたのではと、推測しています。それは四国の香川県に有名な石清尾山積石塚群です。古墳時代の墓制の中で、竪穴式石室を供ないその上に、小石や割石・河原石を用いて、墳丘を築いた古墳であって、一般に積石塚古墳と呼んでいます。

この積石塚古墳が瀬戸内海に面した四国・中国地方で確認されている。詳しくは次の章で説明します。一般には高松市の石清尾山積石塚群が有名です。岡山県では都窪郡山手村水別にある標高 192mの頂上から南尾根筋にあり、積石塚古墳が7基と土盛の古墳が13基の古墳群として分布している。私もこの積石塚古墳に行き素人なりに調査をしてきましたが、頂上から都窪郡山手村地区、総社市方面が良く見える場所である。

この狸岩山積石塚古墳の文献資料として、1994年に間壁忠彦氏の「生坂狸岩山積石塚」と題して『倉敷の歴史』第4号に執筆されている。それと1999年3月の『地域に根ざして』という記念文集の中に、物部茂樹氏が「岡山県狸岩山古墳群中の積石塚」と題して、墳丘測量と竪穴石室の実測された報告書であります。古墳の分布図等に関して、石室の寸法も実測され、詳細に調査された貴重な資料です。

その他の学術資料としては、1980年刊行の『月刊考古ジャーナル 180号 9月増大号』の中で「積石塚の地域相、中国地方」と題して小野忠熙（ただてる）氏の中国地方の積石塚の分布一覧表が掲載されており、遺跡名・所在地・墳形・基数・内部構造などに区分されています。岡山県内の積石塚遺跡として次の7箇所が掲載されています。①水江古墳 ②首塚 ③友延西山山頂積石塚遺構（備前市東片上友延にあり、墳形は長円形、基数は1基）④狸岩山積石塚 ⑤今見古墳群 5号墳 ⑥椋

（すくも）山集石遺構 ⑦楯築遺跡が表示されている。小野忠熙氏は「注」として岡山県の積石塚については近藤義郎氏と西川弘氏の教示を得ると記している。

私はその中で③の、備前市東片上友延の友延西山山頂積石塚遺構について、気になっている。熊山遺跡と近い距離にあることと、熊山遺跡の周辺には、備前市香登には新羅系の秦氏がいる点から、熊山遺跡の築かれている場所には、積石塚集積遺構があったのではないかと推測している。その集石遺構の石を利用して熊山遺跡が仏塔として、新羅系の渡来人によって作られた可能性はないだろうか。

備前市東片上友延の集石遺構との何か接点を見出せたらと考えている。その意味で積石塚古墳が岡山県内の、瀬戸内海に面した地域に点在していることに注視したい。積石塚古墳と熊山遺跡との接点があればと考え、岡山地域の積石塚古墳に目を向けてみた次第です。

4. 四国の積石塚古墳



石清尾古墳群の石船塚船形石棺



石清尾古墳群の猫塚積石塚古墳



四国には積石塚古墳が多く存在している。特に香川県には双方中円墳2基のほか、20基の前方後円墳の積石塚があつて、善通寺市周辺・坂出市・高松市・東讃の津田町周辺の4グループに分かれて分布している。

善通寺市の野田院古墳は墳丘前方後円墳で、堅穴式石室を持ち、標高 400m で香川県で最も高い位置にある古墳とされている。熊山遺跡の標高が 508m だから 100m ぐらい野田院古墳が低い、熊山遺跡の場所に積石塚古墳があったと仮定しても、標高的な面では大差がない高さの位置である。

高松市では中山町に横立山経塚古墳があり、立派な堅穴式石室の積石塚である。特に有名な石清尾山（いわせおやま）古墳群は標高 231m ぐらいの位置にあり高松市街地の背面（南側の山塊に存在する。今では古墳付近まで住宅地になっている。この古墳群の中で著名なのは、双方中円墳の猫塚と前方後円墳の石船塚である。猫塚古墳（4 世紀中頃から後半）の複数の古墳の石室から多くの出土品があり、石清尾山古墳群の中で最古の古墳とされている。出土品として舶載内行花文鏡 5 面、碧玉（へきぎょく）製石釧（せきせん＝青緑の石のうでわ）1 個、小銅剣 20 振、筒形銅器 3 個銅鏃（どうぞく＝やじり）9 個が出土している。それと積石塚古墳として、古いもので鶴尾神社第 4 号古墳があって、全長 47m の前方後円墳で、前端がバチ型に開く前方部を持ち、後円部には東西方位に埋地された堅穴石室から、中国製の方格規矩四神鏡が出土して、墳丘から葬祭に使用された土器が出土している。これらの土器類は、近畿地方の古墳時代初頭の土師器（はじき）、庄内式土器に併行するものとされ、香川県では古墳時代最初期から、首長の墓制として積石塚古墳が取り入れられていたとされている。



中国吉林省集安市の積石塚古墳群

しかし積石塚古墳も 5 世紀頃から衰退してくる。岡山県側の積石塚古墳と四国側の積石塚古墳について触れましたが、積石塚は高句麗前期・中期頃の墓制で、鴨緑江（おうりょくこう）中流域の古墳群があって、吉林省集

安地域で数多い積石塚が築かれている。將軍塚などが有名である。その他の流域にも積石塚古墳が分布している。その後朝鮮半島を経由して日本列島に伝播。四国や中国地方の沿岸部そして長野県の北信濃の千曲川右岸埴科（はにしな）郡と高井郡に分布し、高井郡の大室古墳群には 465 基の積石塚が確認されている。積石塚のある地域には渡来人（秦氏族）との関係が深いと思われる。

5. 和気氏と河内国の秦氏族と神社

和気氏の系譜について祖先の伝承によれば、第 11 代垂仁天皇の皇子鐸石別命（ぬでしわけのみこと）の、曾孫の弟彦王が神功皇后に反逆した忍熊王（おしくまおう）を和気関に攻め滅ぼし、その功により藤原県（ふじわらのあがた）を与えられ、やってきた弟彦王は藤原県に土着し、一族は備前美作に繁栄した氏族で、和気清麻呂・広虫はその後裔である。

大化改新以前は県主（あがたぬし）で改新後は郡司であった。清麻呂は天平 5 年（733）に備前国藤野郡（現在の和気町）に生まれ、姉の広虫は 3 歳年上とされる。二人の家柄は和気郡の郡司であった。広虫は采女として都に上京し、平城宮の後宮で女侍従として仕え、後に孝謙天皇の腹心となり、孝謙天皇が出家された時に広虫も出家して、法均と名乗っている。

清麻呂はその後、天平勝宝 4 年（752）に、最初は近衛府の武官として朝廷に仕える。清麻呂二十歳の頃である。

先に和気氏の祖は鐸石別命（ぬでしわけのみこと）であると述べた。その後裔として磐梨別公と、同族の石成氏がおり。金属精錬に

関係した氏族です。

河内国大県郡大里郷に鐸比古鐸比売神社が鎮座している。祭神は和氣氏と同じ鐸石別命を祭祀し、秦氏系で、鍛冶・鑄工の集団が奉祭する神社なのである。

和氣氏は河内国の高尾山の鐸比古鐸比売神社と関係があります。それは岡山県和氣郡佐伯町の八幡宮所蔵の建武元年（1334）に書かれた『神村山記』所院の弘文院記には、「和氣氏の始祖の鐸石別命は、河内国大県郡高尾山に葬られ、鐸彦神社が創始され、鐸石別命の曾孫の弟彦王が、備前国の神村山へ高尾明神を遷座し、創建したのが和氣郡和氣町にある和氣神社である。和氣氏の氏神で、祭神は鐸石別命・弟彦王・和氣清麻呂となっている。

鐸比古鐸比売神社は式内社で、古くは高尾山山頂にあったと、伝えられていて地元では、高尾神社とも言われていた。「鐸」は銅鐸の鐸と通じて、高尾山の近くの恩智遺跡から銅鐸が2個出土し、高尾山山頂の近くから、銅鏡としては古い時代の多鈕（たちゅう）細文鏡が出土していて、銅鐸銅鏡の製作が、河内国の大県郡地域で行なわれていた関係から、鐸比古鐸比売の信仰があり、秦氏族の高尾忌寸（たかおいみき）は高尾山の名をとった氏族であろうとされている。河内国の秦氏族と和氣氏の関係が深いことを知ることができるのです。

6. 大仏造立と河内国の知識衆

聖武天皇は天平12年（740）に、河内国大県郡大里郷にある、知識寺の盧舎那仏を拝して、大仏造立を思い立つのである。「知識」とは、その当時の民間信仰集団で、造寺、造仏、造鑄等の時に、労力・財力・技術を出し合う集団の組織とされている。寺院や塔を建立する場合に、民衆からの浄財や技術面の協力・労力を知識と呼んで、これらの人達によって作られた寺を、知識寺と称している。そして鑄造や鍛造の技術面を受け持つ人達を、金知

識衆と呼ばれ、大仏を造立した時には、この金知識衆の役割は大変大きいものがあったとされている。河内国の高安郡・大県郡の金知識衆は秦氏系の氏族で鐸石別命を祭神としている。和氣氏は鐸石別命から出ている。このような点からしても、秦氏と和氣氏は深い関係があることを再認識することができる。

7. 渡来人秦氏に関して

古代において朝鮮半島や中国大陆から渡来し、日本列島に定住した人々の総称として、渡来人という呼称をしているが、かつては帰化人との呼び方が主流であった。

古代の氏族系譜集成として、『新撰姓氏録』＝弘仁6年（815）編集があつて、京都・畿内に本籍をもつ1182氏の出自や家系が記されていて、その中に渡来人が諸蕃として全体の30%を占め、326氏について記載されている。内訳は漢系163氏、百済系104氏、高句麗系41氏、新羅系9氏そして任那系9氏となっている。

弥生時代になると半島からの移民が増えて、古墳時代にはヤマト政権に仕える技術集団としての渡来人が列島にやって来て、各地方に分布した。その後大和政権が徐々に確立すると、仏教寺院建築、土木の技術を伝え、古代日本における文化発展形成に、過大な影響を及ぼしている。渡来氏族として秦氏と漢氏（あや）2氏族があつて、秦氏系は新羅系で漢氏系は百済系の渡来人である。

漢氏も東漢氏（あずまのあや）と西漢氏（かわちのあや）があつて、東というのは生駒山金剛山脈の東側、つまり大和の方にいるのが東漢氏で、西の漢氏は生駒山金剛山脈の西、河内国の漢氏であるから、西漢氏と称されている訳である。

秦氏が渡来した経緯について、古事記・日本書紀・新撰姓氏録の文献に見えるのですが、古事記には秦造（はたのみやつこ）がいて、応神天皇の時代に日本へやって来たとしか書

いていなくて、日本書紀になると弓月君（ゆみづきのきみ）という人が、百済を経由して自国の人歩を、百二十県を連れて来たが、途中新羅人に妨害され、加羅国に留まった・・・と記してある。姓氏録には秦の始皇帝の子孫として、弓月王・功智王という子孫の王の名前を挙げ、雄略天皇の時に多くの絹織物を献上したので太秦（うずまさ）という氏族の名前をもらったと、内容が具体化して、文献によって内容が変化している点に気付く。

この様に寺院、神社の縁起に関しても、我田引水の面があるかも知れないが、岡山県内にも秦氏と関係のある地名とか寺院跡がある。8世紀頃の人物で備前市香登の香登臣の姓を賜った秦大兄、邑久郡積梨郷に住んでいた秦造国足と秦部国人、9世紀頃で美作国久米郡三保村大字錦織（にしきごり）にある村社の錦織神社に祀られている秦豊永がいる。備前市香登本に大酒殿跡との大きな石碑が建っている。香登臣秦大兄の先祖を祀っていた大酒殿跡であるとの地元の言い伝がある。

私はこの大酒について思いつく点があります。それは兵庫県赤穂郡上郡町大枝新に鎮座している大酒神社があつて、秦氏の秦河勝を祭神としている。秦河勝は書紀では推古紀と皇極紀に登場するので、7世紀前半に活躍した人物としている。また山城国に秦氏の本拠地である太秦の広隆寺の境内に、大酒神社があつて、延喜式の神名帳には山城国葛野（かどの）郡の条に「大酒神社元名、大辟神」と記してあり、酒という字が辟（さけ）となっている。避（さけ）や大避（おおざけ）神社が、兵庫県赤穂郡上郡町には五社ある。

この地域は昔から、金銀銅鉄の産地で、これらの金属の採鉱と精錬の技術者集団である秦氏族が居住しており、秦河勝を祭神として、大酒・大避神社として、祭祀していたと考えられる。

兵庫県宍粟郡千種町は千種鉄・千種網の産地で、秦氏の秦河勝を祭神としている大避神

社が多い。備前市の香登にある大酒殿跡は、京都の太秦（うずまさ）の秦河勝との関係があるのではと思っている。

香登の秦氏には、続日本記に文武天皇2年（702）秦大兄に香登臣を賜うときされている。備前地域には殖産技術・土木技術・焼き物造りの秦氏の技術集団がいた。そして吉井川流域を中心に、勢力を拡大したい磐梨別公が居て、吉井川の砂鉄での製鉄・鍛冶の技術をもって、勢力の範囲を拡大しながら、渡来人の秦氏との関係を深く持っていたのが和気氏である。

8. 熊山遺跡が築造された背景



和気神社境内の和気清麻呂像

仏教が日本に伝来したのは、一般的に538年とされている。その後国分寺や国分尼寺が全国に建てられる。天平13年（741）2月に造営の詔（みことのり）が出されたことによるものである。官大寺や国分寺に加えて、全国各地で国司や郡司をはじめとする地方豪族の氏寺が建立される。そして渡来人の氏寺として、広隆寺・松尾寺・太秦寺・知識寺などが建立される。そして聖武天皇は天平12年（740）2月に平城京から難波宮に行幸した。その途中で河内国の大県郡（おおあがたぐん）の知識寺の本尊の盧舎那仏（るしゃなぶつ）を礼拝し手深く感動して盧舎那大仏を造る意

志を固めたと伝えられている。

そして9年後の天平勝宝4年(752)4月9日大仏開眼法要が盛大に行なわれた。奈良時代は仏教文化によって、飾られた時代である、東大寺の大仏は聖武天皇の発願によって建立され、この大仏を造るとき、その思想の拠り所は「華嚴經」の教えであったとされている。

華嚴經を初めて日本に伝えたのは唐の道璿(どうせん)702~760で天平8年(736)のことで、華嚴經を最初に講義したのは新羅の僧の審祥(しんしょう)であり、聖武天皇は審祥を東大寺の金鐘(きんしょう)道場に招いて華嚴經を講義させている。大仏開眼供養の導師は、インド僧の菩提僊那(ぼだいせん)な。東大寺建立の責任者として采配を振ったのは、新羅人の良弁である。都の大仏開眼供養には、都を中心とした多数の人々が見守る中で盛大に執り行われたと思われる。

大仏開眼供養が行なわれた当時、和氣清麻呂が20歳で近衛府の武官として、都へ任へていたとしたら、大仏開眼供養の状況を見守っていたことであろう。大仏開眼供養から4年後の天平勝宝8年(756)2月25日の条『続日本紀』孝謙天皇が大仏建立のお礼にと、河内国大県郡にある知識寺・山下寺・大里寺・三宅寺・家原寺・鳥坂寺の六寺に参詣したことが文書に見える。全て秦氏族に関係した寺である。河内国の高安郡の秦忌寸(はたいみき)、高尾山麓の大里郷に居住していた高尾忌寸、常世(とこよ)赤染(あかそめ)連(むらじ)は金知識衆として、大仏造立に貢献した氏族である。これらの点から見ても、当時の渡来人の技術集団の功績が大きかったかを、認めざるを得ない。

その後天平宝字6年(762)孝謙天皇は出家する。この時孝謙天皇の腹心として仕えていた、和氣広虫も出家して法均(ほうきん)と称した。この天平宝字6年(762)から8年(764)に畿内や近江国が飢饉疫病に襲われ、

餓死者や疫病による死者が増大し、平城京に飢えた人々で埋まっていた。このような混乱の中、天平宝字8年(764)9月11日藤原仲麻呂の乱が起こる。この時に吉備真備の作戦によって仲麻呂は討たれるが、孝謙天皇は民衆の心の不安や国家鎮護の為に、仏教による救いを願う対策として、西大寺七尺金銅四天王像を造ることと百万塔及び諸寺、小院塔の造営が誓願されたと東大寺要録に記されている。また奈良市高畑町にある頭塔も、良弁の命によって実忠が国家鎮護の為に造立したと、これも東大寺要録に記されている。

この頭塔が造立されたころ和氣清麻呂は都にいて、35歳くらいの年齢である。頭塔・土塔が造立された目的は何かを知っているし、頭塔も自分の目で見ていると思われる。姉の広虫も都で孝謙天皇の腹心として活躍していた頃である。飢饉・疫病・仲麻呂の乱等で民衆の苦しみと不安は増大する中で、仏塔を造立して仏教による国家鎮護を願って、和氣清麻呂も故郷の備前国和氣の国司・郡司達に仏塔の造立を提言して、奈良の頭塔に類似した仏塔を、熊山の山頂に秦氏族の技術集団によって造らせたのではと、私は推測している。

参考文献 1 兵庫の中の古代朝鮮

2 考古ジャーナル 180 1980

3 和氣の歴史 仙田実著 S55年

4 和氣清麻呂 平野邦雄著

5 歴史公論 6 1976年

6 和氣郡誌

吉備と秦氏(1)

会員 山田良三

(岡山郷土歴史文化研究会 代表)

はじめに

古代日本には数多くの渡来集団がやってきましたが、その中でも秦氏が最大の渡来集団だと言われています。そして秦氏は日本の宗教、文化、産業など極めて多くの分野で日本の古代国家成立に深く関わった歴史を持っています。

我が故郷吉備は、古代国家成立の時代から、日本列島内において有数の文化を築いてきた地であることはすでに知られているところであります。その吉備の古代国家成立に極めて大きな関わりを持っていると考えられるのが秦氏です。

吉備には数多くの秦氏に由来すると思われる遺跡が存在しています。それらを検証しながら、古代国家成立の時代における秦氏と吉備との関わり、さらにはその後の秦氏と吉備のことを考えてみていきたいと思います。

秦氏研究の動機

私は、日本の各宗教について関心を持ち研究する機会があり、その中で岡山県に縁のある宗教家が極めて多いことに気づきました。中でも代表的なのが法然上人と栄西禅師です。法然上人は浄土宗の開祖であり。栄西禅師は禅宗・臨済宗の開祖です。その後も多くの宗教家が現れますが幕末から明治にかけては黒住教や金光教が隆盛を極めます。

さてこれらの宗教家のルーツや背景を探っていくと、そこに「秦氏」が深く関わっていることを発見しました。さらに調べていくと、日本の神祇信仰や仏教などの諸宗教にも秦氏が深く関わってきたことを知るようになりました。

すでにご存知の方も多いでしょうが日本の神社の中で数が多いのが八幡宮と稲荷宮です。そのいずれもが秦氏の氏神様です。そのほかにも多くの宗教が秦氏と関わっています。

秦氏は殖産の集団でもありました。総社市秦の福谷にある姫社神社は鉄産の神社です。秦氏は鉄や銅の加工や、焼き物、織物、土木技術などに優れていて、総社市の湛井の堰は秦氏の築造と言われています。造山古墳などの巨大古墳の築造も秦氏の土木技術があつてのことではないかと思われます。

一.秦氏とは何なのか

1. 秦氏とは

秦氏とは一体どのような集団だったのだろうか、その出身地や集団の性格など興味深い内容がたくさんあります。まずそのいくつかを参考資料を交えて探してみたいと思います。

秦氏に関しては様々な本が出版されており書店に行っても数多くの書籍が並んでいます。その中の一冊、『秦氏の謎』には秦氏には次のような謎があると書かれています。

- 1.) 平安京造営の黒幕は秦氏である？
- 2.) 秦氏の残した文化～宗教と技術の謎
- 3) 秦氏は何処から来たのか？その渡来の謎
- 4) 秦氏はユダヤ人？景教徒か？
- 5.) 秦氏のルーツはイスラエルの十氏族か？

日本列島に渡来した集団中で最大の集団でありさまざまな遺跡や記述も残っているにも関わらず秦氏にはまだまだわからないことがたくさんあるようです。

(1)記紀等に記録される秦氏

古事記、日本書紀及び新撰姓氏録には次のような秦氏に関する記述が残されています。

古事記 日本書紀 新撰姓氏録にある秦氏渡来の伝承（資料『秦氏の研究』大和岩雄氏より）

古事記	日本書紀	新撰姓氏録
		仲哀天皇八年、功満王来朝。 (左京、太奏公宿禰の条)
応神天皇の御世、秦造の祖渡来。	応神天皇十四年百濟から弓月君来朝、弓月の人夫を加羅から連れてくるため、葛城襲淳彦を派遣。 応神天皇十七年弓月の人夫、葛城襲津彦と共に来る。	応神天皇十四年、融通王（一名 弓月王）百二十七県の百姓を率いて帰化。 (左京、太奏公宿禰の条) 応神天皇十四年、功智王・弓月王来朝・上表。更に帰国し、百二十七県の百姓を率いて帰化。 (山城国、秦忌寸の条)
	欽明天皇元年、己知部投化。	

これらを見ると秦氏は古代最大の渡来集団であり、応神天皇の時、弓月の君が127県の民を率いて来たとされています。

2. 秦氏の持つ特性

秦氏には様々な特性があります。秦氏の持つ特性の中で最も顕著なものは神祇信仰であり次に殖産の民だということです。そして日本の芸能の歴史にも深く関わっています。

1) 神祇信仰

・秦氏が関わる神祇信仰には八幡、稻荷、白山信仰のほか修験道などもあげられています。

<参考>

秦氏が祀ったとされる神社（大和岩雄『秦氏の研究』

より）

- ①香春神社 ②宇佐八幡宮～全国八幡宮の総本社
③鹿児島神宮（大隅正八幡宮）④韓国宇豆峯神社
⑤伏見稻荷大社～全国稻荷社の総本社
⑥木島坐天照御魂神社～三柱鳥居 ⑦養蚕神社
⑧松尾大社 ⑨白山神社 ⑩志呂志神社・白髭神社

⑪大酒神社～祭神：秦川勝

⑫大避神社～坂越の大避神社とその他の大避神社

これらを見ると秦氏の祀った神がいかに多く、日本の神祇信仰のかなりの部分を秦氏が皆ってきたことがわかります。

その他にも係わりが指摘される神社・仏閣等がたくさんあります。その中からいくつかを挙げると以下のような社寺が挙げられます。

・猿田彦神社・熊野社・由加神社・妙見信仰・金比羅宮
この他にもあると思います。私が様々な文献その他で目にしたうちの主なものです。

2) 仏教

仏教関係にも秦氏との関わりが多く見られます。

①秦氏による古代寺院～特に吉備の古代寺院は秦氏との関わりが指摘されています。

②秦氏が招来したと言われる「弥勒信仰」～京都太秦の広隆寺の弥勒菩薩像ほか秦氏と関わる神祇信仰には神仏混交において弥勒信仰が見られます。

③最澄・空海など秦氏との密接な関わりを持つ宗教家に弥勒信仰が見られる。～最澄や空海の信仰には弥勒信仰が深く関わっています。また兩人とも師弟関係や宗教活動の関係上秦氏との関わりが密接に伺われます。

④浄土宗の開祖法然上人はその出自が両親とも秦氏でありさらにその修道の経過においても秦氏と深く関わっています。

3) 芸能

日本の伝統芸能を形作った世阿弥も秦氏で

あると言われています。

4)殖産・技術

銅鉄の加工、製陶、土木、織物など古代国家の形成に欠かせない重要な産業に秦氏は関わっていたとされています。吉備もそうですが、秦氏はその住居とした地域においてその時代としては先端的な技術を保有していい、先に挙げたような様々な産業に従事していた足跡が残っています。

<参考>

☆秦氏から出たとされる氏姓(『秦氏の謎』より)

秦氏系の姓として次のような諸姓が挙げられています。

畑 端 秦 畠 波田 波多 波蛇 羽田 八田 半田 矢田 秦野 畠山 畠田 畑川 波多野

畑中 広畑 八幡 服部 林 神保 宗(対馬の宗氏も) 浅原 太秦 惟宗 田村 島津 長田 長倉 辛島 小松 大蔵 依智 三林 小宅 高尾 高橋 原 常 井出 赤染 大幡・・・・等々

これらの姓が全て秦氏とは言い切れないかもしれませんが、この中には戦国大名の島津や長宗我部など日本の歴史に大きく関わった家系も多く存在します。この家系も秦氏か！と驚かれるかもしれません。

3.山背の秦氏

秦氏の事跡の中で最もよく知られているのが平安京造営に関わったとされる山背の秦氏です。

秦氏と平安京造営 日本と朝鮮の関係史(監修上田正昭)『平安京造営をめぐる渡来人群像』著:井上満郎によると、平安京と秦氏との関わりがいかに密接であったかがよくわかる。その中からいくつかの内容を紹介してみましょう。

- ①「村上天皇記」村上天皇(946～967) 平安京の大内裏は秦川勝宅であった。
- ②「日本後紀」延暦15年7月条(796) 造営大工の二番目に外従五位下の「秦忌寸都岐麻呂」が就任している。
- ③「政事要略」(平安時代後期の資料集)の「秦氏本系帳」に秦氏一族が葛野大堰を造ったとある。
- ④5世紀後半から末にかけてそれまで古墳の無かった嵯峨野に古墳が成立する。～葛野大堰の建設による？！
- ⑤伏見稲荷、松尾大社は秦氏の氏神～秦氏一族が神社の神官を継承してきている。
- ⑥「山城國紀伊郡司解案」(土地売買の証文) 売り手、買い手、保証人全員が秦氏。この地域の住人の100%が秦氏であったことを証明している。「新撰姓氏録」皇別が335、神別が404、諸蕃が326である。これからすると平安京の時代、現在の京都の西京区は100%、渡月橋あたりでは70%が渡来人であったことが分かる。

このような内容を見ると平安京の造営とその後の平安京の社会においていかに秦氏が大きな影響を持っていたかが歴然としてきます。

4.没落する秦氏

しかし平安末期になるとかつてその力を誇示した秦氏も貴族階級と同化した一部を除いてその職能の民たちは没落して行ったと言われます。法然上人の伝記を読むと法然上人がこれら没落した秦氏の宗教集団とも言える「別当」や「聖」の集団と関わりを持っていたことが伺えます。

二. 秦氏は何処から来たのか？

日本の古代国家の成立から平安京の造営に至る時代に、秦氏は極めて大きな関わり

を日本の歴史に残しています。そもそも秦氏はどこからやってきた人々であり、またどのような性格や経歴を持った集団だったのでしょくか？これらについては様々な説があり、数多くの出版物が出されていますので、その中で筆者がこれと思った記事や説を参考に秦氏のルーツをまとめてみました。

1. 半島南部の辰韓より来た？

三国志（魏志ほか）などに残る記録を見ると朝鮮半島南部に辰韓という国があり、秦氏はこの辰韓から渡って来たのではと考えられています。

<参考>

辰韓とは：辰韓（しんかん）は、紀元前2世紀末から4世紀にかけて、朝鮮半島南部にあった三韓（馬韓、弁韓、辰韓）の一つ。帯方郡の南、日本海に接し、後の新羅と重なる場所にあった地域である。

その境は、南にある弁韓と接しており、入り組んでいた。もともと6国であったが、後に分かれて12国になった。

そのうちの斯蘆が後の新羅になった。（新羅は356年建国とされる）辰韓人は穀物と稲を育て、養蚕を生業としていた。頭は扁平短頭であり、風俗は倭人に似ていたと言われている。

『後漢書』辰韓伝、『三国志』魏書辰韓伝、『晋書』辰韓伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人がおり、馬韓はその東の地を割いて、彼らに与え住ませ辰韓人と名づけたという。そのため、その地の言葉には秦語（陝西方言。長安に都があった頃の標準語で、この亡民が秦代～前漢代に渡来したことを物語る）が混じり、秦韓とも書いた。秦人は王にはなれず、王族は馬韓人であった。

これらの記述から古代史研究者の水谷千秋氏は、「辰韓の民の話す言語は秦の人に

似ており、辰韓は秦韓とも呼ばれていたため、実際に中国からの移民と考えて間違いない」と述べています。

2. 弓月国から来た？

日本書紀や新撰姓氏録に「弓月の君が弓月の民を率いてきた。」とあることから、秦氏は中央アジアにあった弓月国（クンユエ）から来た民ではないかと推測されています。弓月国というのは1～2世紀ころ中央アジアにあったと言われる国のことです。（地図参照）



<参考>～日本にあった秦の王国～

隋書倭国伝に「秦王国」という国が日本列島の南にあったとの興味深い記述があります。

明年 上遣文林郎裴清使於倭國 度百濟 行至竹嶋 南望羅國 經都斯麻國 迴在大海中 又東至一支國 又至竹斯國 又東至秦王国 其人同於華夏 以爲夷州疑不能明也

この記述に出てくる「秦王国」はどこにあったのでしょうか？諸説ありますが、ここに筑紫国の東方と記述されていることから豊国（現大分県あたり）と見る説が一般的ですが、吉備が「秦王国」である見ることもできます。そのほか山背まで含むという説もあります。

吉備と秦氏の密接な関わりを見ると吉備こそ「秦王国」ではなかったかとの思いが強くなります。

三. 秦氏はいつ渡来したのか？

一般的には古事記、日本書紀、新撰姓氏録の記録をもとに秦氏は応神天皇の時に渡来し

たと信じられている。応神天皇の在位時期自体も諸説あるが、問題のひとつはこの時に秦氏の全てが渡来して来たのか？それともそれ以前からやってきていたのかという疑問がわきます。

広開土王碑文や三国史記などの記述から半島における動静と日本書紀の比較をしてみるとほぼ3C末～4C始ころがその渡来の時期ではないかと推察されます。

ちょうど半島南部では4世紀ごろに新羅や百済が勃興し、古代国家体制を取るようになって行きます。同様に倭国（日本）の古代国家体制もこの頃確立していったと考えられています。

秦氏渡来に関して吉備の秦氏の研究家佐藤光範氏は以下のように述べています。

「今、秦氏と呼ぶその氏族の遠祖は、弥生時代から日本に来ていた……これが私の答えである。（佐藤光範氏『はたしてハタ氏か』より）」

私も吉備への秦氏の渡来は4Cよりもっと早い時期に断続的に渡来していたのではと思っています。4C.に半島情勢が逼迫してきた時期に大挙して同族の縁を頼って渡来して来たのではないかと考えます。

四、秦氏のルーツあれこれ

秦氏のルーツには様々な説があります。それらについて少し考えてみましょう。

（1）秦氏は秦始皇帝の末裔か？

秦氏は秦始皇帝の末裔であるとの言い伝えがあります。『秦氏の研究』の著者大和和雄氏は「秦の亡人伝承を持つ人々が、加羅の韓人集団の中核になって渡来したので始祖を秦始皇帝としている」と推測しています。

（2）秦氏はイスラエル十部族の末裔であり、景教徒（ネストリウス派のキリスト教）であった？

1) 秦氏はイスラエルの十部族の末裔でありさ

らにネストリウス派のキリスト教の一派とされる景教徒との説があります。

古代イスラエルについては次のように言われている。

イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされた時真っ先に連れ去られたのが、ルベンド、マナセの3部族だった。（BC8）彼らはアッシリア滅亡後しばらくクリミア半島にいた。（エドワード・オドルム教授の講演より）その後、彼らは東方に向かった。

エフラム族も日本に？（エフライム族は三度目の捕囚でアッシリアに移された。）

参考：古代イスラエル、イスラエル王国
（Wikipediaより）K0

2) 古代イスラエル王国が滅んだのがBC8のころであり、その後の明確な記録は見当たらないが、バビロニア滅亡後ユダ族を中心とする「ユダヤ」王国の末裔はカナン（イスラエルの地）に帰っている。そのほかの十部族はカナンに帰った記録が残っていない。そのことからしても古代イスラエルの残りの十部族が東方へ向かってシルクロードの各地などに独自の国を作っていたことは想像に難くない。

様々に検証してみているがこれらのことはほぼ間違いないものと思われる。

これらのイスラエル十部族の人々が中国からさらに半島、日本列島へとやってきているとしても不思議ではない。日本の様々な宗教儀式やそのほかの文化的要素の中に古代のイスラエルの文化の名残とも言える事例が数多くあることから。「日ユ同祖論」なども唱えられているが、単純に否定できるものではない。

私は古代イスラエルの民族が純粋な形では無いにしても日本にまでやってきているだろうし、またその教えの根本である旧約聖書に見る神や宗教に関する考えかたや様

式がその他の宗教儀式などとも融合しながら日本にまでもたらされているとの説を支持したい。

旧約聖書に見る記述と考古学的検証がある。必ずしも一致しているわけではないが重要な歴史的な内容を含む。秦氏がイスラエルの末裔であるとの確証はいまのところ無いが、否定することもできない。可能性は十分にあると見ていいであろう。

(3)佐伯好郎教授の景教徒説

秦氏と景教について独自の研究をしたことで有名な佐伯好郎教授は、秦氏＝景教徒との説を唱えた。「日ユ同祖論」とともに論議の対象となってきました。

a.景教とは何か？

1 世紀には中国にキリスト教伝来を示唆する記録があります。(漢法本内伝) イエスの弟子の一人トマスが来たのではとも言われています。

トマスはイエスのそのほかの多くの弟子たちが西方＝ローマに伝道に向かったのに対して、東方に伝道に向かいました。インドで殉教したとされていて、インドにはその遺跡が残っています。

トマスの教えが元となり東方教会というキリスト教の一派が形成されました。東方教会は西方に伝わったキリスト教(カソリックやプロテスタント)とはかなり異質な教義や儀式を有していました。今日我々が仏教の儀式だと思っている、香をたく習慣などももとはこの東方教会の儀式で用いられたものだと言われています。

2 世紀頃には中央アジアのほとんどの国にキリストの教えが伝えられていました。その中の国の一つが秦氏の出身地とも言われる弓月国(クンユエ)です。

1623年に中国長安の近くから大秦

景教流行碑という石碑が発見されました。781年に建立、碑には景教の歴史と教義—旧新約聖書の教え等が書かれています。弘法大師空海上人が訪唐の時代景教が長安で大流行していたと言われます。(高野山にこの碑のレプリカが作られています)

さて、先に挙げた佐伯教授の説では景教はネストリウス派キリスト教であるとされています。一般的にはそのように信じられていますが、これには異説があります。

『日本発イスラムが世界を救う』(澤田沙葉著)によると、ネストリウスはニケアの宗教会議で敗れたあと東方教会(シリア教会)に逃れたが、そこでは自らの教義は主張せず、東方教会の教えに従ったとされています。

東方教会は旧約聖書やコーランのもととなる古来の伝承などをもととした独自の宗教観念をもっていました。仏教など他宗教との融合性も高く、景教＝ネストリウス派キリスト教と言うのは正確な表現ではないと澤田氏は述べています。

b.大乘仏教に見られる景教の影響

実は大乘仏教には東方教会あるいは景教の作法の影響がたくさん含まれていると言われています。

その例としては、数珠の使用、香をたく習慣、密教における加持祈祷、教義の内容として、法華経の奥義などにその影響が多く見られると言われています。

また真言密教に見られる、中印や祭具に見られる十字架も景教の名残ではと言われています。

c.秦氏と弥勒信仰

秦氏は弥勒信仰と深く関わっています。弥勒信仰とは仏教の一信仰形態ですが、釈迦の入滅後56億年後に釈迦の次に仏陀

(悟りを拓いた者)となり全ての衆生を救うと信じ、その来臨を待望する信仰です。日本の歴史上では聖徳太子や最澄、空海が熱心な弥勒信仰者として知られています。この弥勒信仰に深く関わっているのが秦氏で、

前述の澤田沙葉氏によると日本に弥勒信仰を持ち込んだのが秦氏であるそうです。

秦氏と弥勒信仰の関係をうかがわせる事例を挙げてみます。

- ・太秦広隆寺(旧蜂岡寺)の弥勒菩薩像
- ・宇佐八幡の神宮寺は弥勒寺、鹿児島大隅八幡も神宮寺は弥勒院でいずれもその名に弥勒を冠していることから弥勒信仰との関わりを見ることができます。宇佐八幡の神宮寺弥勒寺は最初は虚空蔵寺と呼ばれていました。

先に述べた辛嶋氏の本拠地辛嶋郷に宇佐地方で最初に建てられた仏教寺院を虚空蔵寺といい、7世紀末、白鳳時代に辛嶋氏と宇佐氏によって創建され、壮大な法隆寺式伽藍を誇ったといわれます。その別当には、英彦山の第一窟(般若窟)に籠って修行したシャーマン法蓮が任じられたそうで、宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺はこの虚空蔵寺を改名したものです。

宇佐の神官家辛嶋家の辛嶋とは嶋(日本列島)における辛(加羅=秦)の意味であり、法然上人の父方の漆間氏はこの辛嶋の一族の末裔であると伝承されています。

d.最澄・空海と秦氏との関係

秦氏とかかわりの深かった最澄、空海も弥勒信仰者でした。

最澄：唐に渡る前に宇佐に参拝しています。また比叡山の根本中堂の不滅の灯明は「明けらけく後の佛(弥勒)の御代までも灯伝えよ～」と弥勒信仰であることがわかります。こ

れらのほかにも秦氏との関わりを示す事例を多く残しています。

空海：若き日の空海に虚空蔵求聞持法を教たのは、空海にとって公私にわたる大外護者ともいうべき大安寺の勤操であり、実質的な恩師ともいうべき元興寺の護命であったが、この二人ともに出自は秦氏である。また東寺の鎮守は八幡社と稲荷社であることから空海と秦氏との関係の深さを窺い知ることができます。

<参考>

百済、新羅の仏教と弥勒信仰との関係

韓国の各地からは弥勒菩薩像とみられる像が多く出土してその一部は韓国国立博物館に所蔵され、数多く展示されています。そのうち、百済は国家鎮護の仏教で仏像は比較的大きく、新羅は家宅仏教でその大きさが小さな仏像が数多く出土しています。

古代半島の仏教については九州大学教授であった田村 圓澄 先生が詳しい研究をされていますが、その中でも仏教の渡来自体に秦氏が深く関わっていたのではとの推察がなされてされています。(つづく)

今回掲載の文は2012年7月20日に岡山県立図書館で「秦氏と岡山の人物」(主催：岡山人物銘々伝を語る会)及び2013年5月19日(日)に総社市秦の「秦歴史遺産保存協議会」の総会で使用した資料を加筆訂正したものです。

吉備と秦氏(2)は次号に掲載します。

「鉄の杵^{きね}が針になる」

李白の逸話から

会員 大木 初美
(所属 岡山歴史研究会)

李白（り・はく）は、中国の唐（618～907）の二期目、盛唐（712～765）時代に、杜甫（とほ）と並ぶ当時を代表する著名な詩人です。彼が学問に目覚めた逸話を一つ紹介します。

言い伝えでは、彼の少年の頃は、遊び惚（ほう）けて、勉学に集中しなかったらしく勉強は遅かった。ある日、長文の暗記に挑戦していたが、何時もの癖で、集中できず結局遊びに出かけてしまった。家（うち）を出て村の外れの小道を歩き回っていると、一人の老婆が谷川の畔（ほとり）で、鉄の棒を石の上で擦（こす）りながら何かをしている。

不思議に思った李白は、歩み寄って「お婆さん何を擦っているのですか？」と声を掛けた。お婆さんは手を休めることもなく「こうして擦り続け一本の針にするつもりだよ」と答えた。李白少年は大変驚いて「本当に！！」「そんなに太い鉄の棒をこするだけで針にするのですか」完成するまでに相当長い日時が掛かると思い、つい「出来上がるのは何時になるのですか？」と問い返した。するとお婆さんは、笑いながら、手を休めることもなく「坊や、この鉄の棒も毎日擦ってやれば、段々に細くなって、やがて針が出来るのだよ……」「擦っているだけでは、針にならないと心配かい」

李白少年は、このお婆さんの最後の一言で非常に大切なことを学んだ。彼は身を翻（ひ）る返し、まるで飛ぶように家に帰り、先ほど投げ出していた本を持って、暗誦を始めた。

厭々するのではなく、目覚めた彼は何度も

繰り返し、やがて手本を見なくても暗記できるようになった。一節が身につけば次々と進んでいく。長文の本も見事に身につけて時代を代表する詩人として大成した。

ことわざでは「技量を極めさえすれば、鉄の杵（きね）でも（丹念に擦りさえすれば）、立派な刺繍針になる」です。

この話は現代に生きる我々にも、人生の大切な指針の一つでしょう。苦勞して勉強したり、何かを成し遂げようとする人たちを励まします。古今（こきん）を通して、これらの数（かず）知れない事実が重なっていることで証明しています。正しい方向に、向いてさえ居れば、今回の李白の少年時代の逸話は、単に学問だけでなく色々な社会の中で、彼のような偉大な仕事が残せることを学びました。

歴史系エッセイ 6 編

会員 山崎泰二

①縄文人と弥生人の関りを

記紀に見る(猿田彦のこと)

私は予(かね)てから、約2500年の昔に中国の江南(呉の時代)地方から水耕稲作の技術を携えて日本列島に渡来し、先住民である縄文人と「和合」が進み、新しく弥生人の社会ができて今日があると信じて来た。残念ながら素人の浅ましきで、それを立証することが出来ないうちに。そんな矢先に歴史研究会が発行している「歴史研究」なる冊子が届いた。その中に三重県鈴鹿の会員で小林伊佐夫氏の論文「私説 猿田彦の正体」が目にとまり合点した次第である。

記紀による神話の世界に出てくる、猿田彦のことは一般に良く知られている。道先案内の神として身近な存在である。高天ノ原から葦原の瑞穂の国(当時の日本列島)に、ニギノミコトら一行が降臨した時に、地元の国神(くにづかみ)の猿田彦が案内した件(くだり)の説話である。当時(縄文晩期)の日本列島には、豊かな森に木が茂り、清らかな水が小川に流れ、果樹の実も豊富で、川の浅瀬では魚も捕れたし葦原が広がって、先住民(縄文人)が住んでいた。そんな光景が臉に浮かぶ。

先住民も穀物の中でも稲=米の美味しさを知っていて、陸稲を栽培し焼畑を続けながら移動していた。稲の欠点である連作障害を乗り越えるためには、焼畑で移動しながらの耕作であった。そこに水耕稲作技術を持った渡来人は、故郷の中国江南地方に比べ、より管理のしやすい豊富な小川が随所にある日本列島に定住して稲作を始めた。質・量とも先住民の陸稲とは比較にならない。遠くで見ていた縄文人は、戦って排斥するのではなく「和合」の道を選び、お互いの長所・技術・経験を生かした「共生」が始まった。弥生時代のことである。そこに天神(あまつかみ)が渡来して来て日本国を統治することになる。古墳時代を経て律令の大和政権が歴史を創ると、私は推論している。

さて本題に入る。和合の証拠が古事記に猿田彦として登場していたのだ。縄文人の末裔であるアイヌの人々が使っていることばを研究し精査された、小林伊佐夫氏は概ね次のように説明されている。

「猿田彦の猿(サル)はアイヌ語で葦原を意味し、田(タ)はある(有る・在る)を意味する。彦はオトコ(男)の意味で、葦原に住む人達」

との明快な解説である。さすれば国神が天神を案内したとする古事記の編纂者は、当時から約1000年も昔のことを、猿田彦との逸話として我々に残してくれたことになる。

全国歴史研究会の仲間の研究成果で、私の推論がまた一つ確証された。新しい学びを得た「歴史研究」の冊子であった。



「百間川の遺跡探検」

水田の様子

県古代吉備文化財センターのパンフ



弥生末期 岡山の百間川遺跡では田植えをし

②今昔物語の説話より

美作建国 1300 年に関連

今昔物語は西暦 1130～1140 年に源隆国が編者として想定されている有名な物語ですが、ここに現在の津山市にある高野（たかの）神社のことが載っていると、ドナルド・キーン氏は自著の「日本文学の歴史 3」で紹介しています。この物語は短編の説話で、前後の文脈がありません。孫引き文ですが引用しておきます。私も何度かこの神社には訪問していますが、美作国一ノ宮の中山神社（国指定重要文化財）に次ぐ旧二ノ宮で社殿も立派です。

今昔物語 巻第 26 第7話

『今は昔、美作の国に、中参（ちゅうさん）高野（こうや）と申す 神在（かみま）します。

其の神の体は、中参は猿、高野は蛇（へび）にてぞ 在（ま）します。

年毎（としごと）に一度 其れを祭りけるに、生贄（いけにえ）を備へける。

其の生贄には、国人の娘の末（いま）だ 嫁（とつ）がねるをぞ 立てる。』

中参と有るのは中山のことで中山神社に、高野（こうや）は現在の高野（たかの）神社に想定できます。蛇は水の神で直ぐ南に流れる吉井川に関係する神社のことでしょう。最近ドナルド・キーン博士は日本国籍を取得され、著作活動をなさっていますが、日本人以上に日本通の先生です。マスコミにも登場されますが、何時もニコニコして、判りやすいお話は、皆さんに親しまれています。益々健在で活躍をフアンの一人として願っています。

③セキレイ(鶺鴒)は 古^{いにしえ}よりの

身近な仲間

子孫繁栄の願いを込めて

私の住む岡山市の操明学区の仲間と、グラウンドゴルフ等を楽しんでいると、人馴れした小型の鳥が飛んできて、長めの尾を振りながら近づいて来る。スズメよりは少し大きいが白黒の羽がはっきりしていて、日本各地で我々と同じように年中居る留鳥（とめどり）で、名をセキレイ（鶺鴒）と称します。今回の主人公である。我々の仲間もこの鳥の存在は知っていても、鳥の名前を知らない人が多い。

私の知っているセキレイは、セグロ（背黒）セキレイで、平地の水辺に住んでいる。白地の体に背中が黒いことからその名が付いたと思われる。海辺やその近辺ではハク（白）セキレイが、多くは小さな群れをなして飛んでいる。セグロセキレイよりは白味の多い鳥である。慣れないと区別が付きにくい。山郷（やまさと）に入り小川の周辺では、キ（黄）セキレイに会う。華やかな色合いは自然に馴染んで美しい。時に集落で見かけることもあるが、多くは溪谷の川沿で飛ぶ虫を餌にしている。これらの三種類のセキレイは先に述べたように、少し長めの尾を縦（上下）に振りながら、ヨチヨチ歩き近寄って来る。私は見たことが無いが、イワ（岩）セキレイと称する種類は、尾を横に振るそうだ。名の通りキセキレイと同じく溪谷を棲家になっているのだろう。餌は主に小さな飛ぶ虫らしい。



セグロセキレイ(鶺鴒)の雄姿

これらセキレイの大きな特徴は、成長すると番（つがい）になり、一生をペアで過ごす。そして何時も二羽が飛び交っている。逆に一羽のセキレイは、まだ若く独身と言うことになる。単独で飛んでいるセキレイに「早く相方を見つけてね」と私は声掛けをしてしまう。

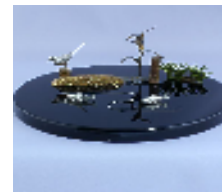
仲良し夫婦は鳩も同じで、鳩はその性質と飛ぶ距離の長さや早さが、中でも帰巢本能があり伝書鳩として活躍している。特に先の大戦の折には、前線の最先端から通信の手段として、軍や新聞社で飼育利用された。戦後はマニアによる競技へと転進していて、わたしも高校生の頃、友達に誘われて飼育していたことがある。話はそれだがセキレイ（鵺）も夫婦仲良しであることを知る人は少ない。

私が小学生の頃に父が入院し、見舞いに行った病室の庭先で、幼いセキレイが蹲（うづくま）っているのを発見した。室内に取り込んで手の上で撫でて可愛がっていると、傍から父が「野鳥は人の手に触れさせてはいけない」「どんなに可愛くても触ってはいけないよ」「幼鳥がこれから生きていくためには、人は近づかない方が好いのだ。離れた所から見てやりなさい」と教えてくれた。庭の外に枯葉を集めそっとしていると、いつの間にか親らしい鳥が来て、暫らくすると離れて行った。特に病身の父からのこの言葉は、数少ない触れ合いの思い出の一つである。

歴史好きの仲間で、長崎五島列島に伝わる記紀を学ぶ「ドンザの会」で、主に古事記を輪読しながら読み進んでいる中に、イザナギ・イザナミの命（みこと）が国造りをする有名な一節がある。この二神から最初に生まれたのはどうも失敗と知り、そこで鵺が男女交合の道を教えた、との説話を知ることになる。ここではセキレイのことを「にわ くなぶり＝鵺」として登場する。『にわ くなぶ

り 有りて 首（かしら）揺（うごか）す 二神（イザナギ・イザナミ） 見（みそわ）して 交（とつぎ）の道を 得つ……』（原文は当然漢文調）とあり、どうも古（いにしえ）の先人も、セキレイ夫婦が仲良し鳥であることを知って居り、特に番（つがい）で仲良く長い尾を振るさまが、求愛の仕様に似ていて、色っぽく少々エッチなことを連想させたのでしよう。**別名＝とつぎおしどり(嫁教鳥)など**

そんな話を歴史系ウオークの途中で交わしていたら、「そう言えば婚礼の式に『鵺台』なる床飾りが、縁起の良いものとして飾られている。鵺台の意味がそれに由来しているのですか」と聴かれて、我が意を得たことがあった。



鵺台の一例 商品としてセットになっている

新しい夫婦の初めての根固めとして、寝所に雌雄の鵺の番（つがい）を飾り子宝を願った風習を知る人も少なくなった。

この項を纏めていたら、気になることを思い出し、書架の中から西鶴の「好色一代男」を取り出してみると、冒頭に矢張り記載されていた。

『鵺のふるまいを見て ようやく男女交合のことを悟った故事』と出てきた。元禄（1688～1704）の世で庶民の間で広く知られていたことも頷ける。

古事記等に出てくる鳥には、烏（カラス）や鶇（ウ）などが有名だが、このセキレイな

るスズメ科の留鳥は我々の身近に共に棲息している。この環境をいつまでも残したいものである。

古(いにしえ)人からまた一つ学びました。

④^{むらさき}紫草に託する「妖しき」

万葉人との関り

新聞の連載小説で気に入りのものは配達と同時に目を通し、前日のものは切抜きを保管している。気に成る他の記事も含めて、何年も続く。もう一つ、初老の域になり夕食後早々に床に入り、早朝と言っても深夜日付が変わるころ、目覚めた床の中で主に歴史系の書物を調べたり、時に拙文を纏めたりする習慣を楽しんでいる。枕元には何冊かの書物が重なって賑々しい。その二つの趣味的習慣が交わって、万葉集巻一の20と21(668年)の句が、今朝(1/28)の山陽新聞連載中の『紫句へる』の中のくだりと、ドナルド・キーン著『日本文学の歴史』の万葉集の解説の引用句が、朝の寒気が漂う床の中で合体した。それも男女の秘められた妖しげな描写の場面である。初老の身でありながら多少の興奮を感じペンをとる。

新聞連載のこの日の概要は次の通りである。文脈の関係で少し触れておく。江戸期の中級武士の家庭の主婦である主人公＝濤(みお)が、主人(蔵太)の妻(主人公)への想いを知り、その仕草つまり、「庭先に紫草(主に染色用に使う可憐な草花)の種をまき、その花を妻(濤)の優しさで育ててくれる」と信じ、自分の幼娘との、会話を通して知ることになる。そんな主人の想いも知らないで、雑草の一種として抜き取っていたのだ。思えば紫草は万葉人が『紫(草)のにはほへる 妹(おも)を憎くあらば 人妻ゆゑに 我れ恋ひめやも』と額田王(ぬかたのおおきみ)に返歌した大海人皇子(おおあまのみこ)＝後の天武

天皇の句を、若き日に母上さまから教わった「紫草」であることに気が付いた。主人(蔵太)がその句を知っていて、紫草を庭に植えたのであろうか。濤(みお)が嫁ぐ前に情を交わした誰にも(父・母にも)言えない淡い想いを秘めて物語りは展開していく。

一方万葉集巻一の20・21は、天智天皇が催した狩場で、額田王と大海人皇子との、作られた対句で、今は兄の天智天皇の正式な妻になっている額田王に、かつての夫である大海人(この時は皇太子)が、当時の求愛の表現である「袖振る」合図をしたことに対して、額田王が『あかねさす 紫野行き標野(しめの=天皇の御料地)行き 野守は見ずや 君が袖振る』と詠じた。皇子の変らぬ気持ちに、本音の嬉しさと、立場上これに応えられない複雑な戸惑いの気持ちを詠んだ。これに対して大海人が先に紹介した句を返歌したものである。教科書に載る有名な句だそう。

天智天皇は、母である斉明女帝の皇太子であつたころに、自ら陣頭指揮をして戦った白村江(はくそんこう＝しろすきのえ)の戦いに大敗した後に皇位についた。朝鮮半島から渡来(新羅系)した氏族の貴婦人で、才女の額田王は、当初は弟の大海人皇子と結婚して一子(大市皇女＝弘文天皇妃)があるが。天智天皇が即位した後で、そちらの妻になった有名な女性である。

そんな男と女の微妙な情愛の中で交わされた、万葉人の高貴な人達の光景の一端が、連載小説で江戸期を描き、その女主人公の切ない気持ちを、万葉の世界と重ねた作者の意図が読み取れる。作中の登場人物の今に変らぬ情愛が表現されていて、私の生活の一端の中で交差した。時代は変わっても人間の見えない妖しい大人の恋情は変らない。

作家の葉室麟氏の作家冥利に尽きるかと、

古稀を過ぎた凡人でも「紫草」の妖しさに江戸の婦人の、微妙な心の移ろいに接して感動する。「紫」のかもちだす接点にたまたま遭遇したことの奇縁を嬉しく思う。

⑤先人の知恵＝千入(ちしお)

古稀の歳を重ねていながら、日本のことばの奥深さや本当の意味を知らない。毎朝の新聞やテレビ・ラジオから流れる語彙について意味も判らないまま、先を急ぎ聴き流していることの多さに、やっと気づくようになった。そんな矢先にふと目に触れたのが「千入」と記して「ちしお」と読ませる単語である。私はルビが無ければ「ちいり＝せんいり」と読むところであった。

手元の明解国語辞典にも載っていない、そこで岩波の広辞苑を開くが「ちしお」では掲載されていない。一般には使わない「古語」なのだろうか。そこで改めて入(しお)で検索すると、辛うじて広辞苑に載っていた。『入(しお)＝布を染め汁に浸す(漬ける)度(たび)に数える時に使う言葉』とあります。例えば一回浸すのは一入(ひとしお)、二回漬けると再入(ふたしお)、何回も漬けると八入(やしお)、千入(ちしお)、八千入(やちしお)とあり、やっと千入(ちしお)に辿(たど)り着いた。平安人から使われている歴(れっ)きとした大和ことばなのだ。

古人(いにしえびと)が衣(きぬ)を染めるのに、何度も何度も染料の液が入った壺に布を浸し、乾かし、それを幾度も繰り返して眺めながら、自分の求める納得のいく「色合い」に染め上げる。冷たい流水に染料のアクをとる作業は、今日も伝統技術として生き残る。

こうした職人さんの世界では千入(ちしお)は、今に生き継ぐ「ことば」なのであろう。

そうした光景が瞼(目蓋＝まぶた)に浮かんで来て、やっと真の意味が判った気持ちになる。入を「はいる」としか知らないでいると、これらの光景は浮かんでこない。

古今集の春の詩(うた)に「ときはなる 松の緑も 春くれば 今ひと入(しお)の 色まさりけり」とこの広辞苑は教えてくれる。元々松の葉の色合いは、落葉樹のような見事な新緑・紅葉の変化はありません。見方によると一年中同じ葉色に見えることでしょう。

しかし平安人には春の気配をこの松葉の僅かな色合いの変化までを「今ひと入(しお)の色」として認知しているのです。人としての感性の深さに益々感動させられ、雑多な時の流れに身を任せている我々(特に自分自身)を恥じ入ることしきりである。

われ等が住む岡山後楽園には「千入(ちしお)の森」が存在する。ルビが振ってあったのかどうか。若しかして「ちいりの森」と呼んでいたのかもしれない。わが身の浅学に恥じ入るばかりであるが、池田綱政公の命名だそうで、特に秋の紅葉が日毎に変る様子を現したとされています。道理は知らなくても、現在の後楽園の名所に残り来園者を楽しませてくれています。有り難いことです。



岡山後楽園のHPより

八入(やしお)の衣(きぬ)とか千入(ちしお)の表現には、何度も何度も手間隙かけた職人の無言の技が含まれて、今の世に麗麗と伝わっていることを学びました。

⑥「お祓い箱」と「お払い箱」

2013年（平成25年皇紀2673年）10月2日は伊勢神宮の式年遷宮で、特別な祭事である遷御が内宮で執り行われる。そんな朝に枕もとの冊子『歴史研究』の特集コラムが目に入った。

《伊勢へ「おかげ参り」ならぬ「ぬけ参り」をした下人を主人が手討にした。そのなきから(亡骸)が翌朝「御祓い箱」に一筋の刀傷が残って……当の下人は生きていた》

そんな話の件（くだり）に出てくる「御祓い箱」に私の目は止まった。

流行（はやり）のお伊勢参りがしたいのに道中の路銀も持たず、思い余り親方に無断で「抜け参り」した下人。それ自体は悪いことであっても、無慈悲に手討をした主人を揶揄（やゆ）した語り草を伝えている。

ぬけまいり＝役所の許可もなく路銀も少なく、道中の接待に頼って伊勢参りをする、江戸期に民衆の中で流行った一種の風習。

本来の「御祓い箱」の意味は、お伊勢参りが盛んになる江戸期に、御師（おし）が各地御師（おし＝諸国からの、参拝者を宿(自分の)や参拝の世話をする専門家で業としていた。神への、取次ぎも行う特殊な面もある。

の信者（中でも檀那衆を大切にした）へ、御祓い幣（おはらいぬさ）別名、神宮大麻（たいま）を配っており、その大麻札を納める箱を毎年、新品を配り古い札と箱は回収した。お伊勢参りにはそんな風習があった。その伊勢神宮特別な箱のことを「御祓い箱」と称している。古くなったお札は、小正月の「トンド」さんで、神様にお返しするのが当時からの、仕来りだった。そこから不用なものを処分する意味に使われて今日がある。

残念かなこれらの「御祓箱」も「御師」の制度も今は廃れた。言葉だけが残っている。

実は最近の社会は、多くの弱者が「お払い

箱」にされているそんな風潮を強く感じていて、日頃の反骨魂が、この言葉に反応した。

学生のアルバイトや主婦のパートぐらいは許せても、リストラ・フリーター・ニートなどの若者が増えた。終身雇用制がグローバル時代を生き残る、企業の戦略として非正規雇用やリストラを、しやすい労働環境に変わって来たのが原因かもしれない。

「石の上にも3年」との教えに生きた我々と、「嫌なら辞める」今の若者との生き方の違い、だけなのであろうか。若者も終身雇用で一つの職場に拘束されるのを嫌い、会社も何時でも解雇のできる環境の方が好ましい。現代社会の思惑の一致が、弱者虐めの「お払い箱」になっていないか。

昔から生活の苦しさから、年寄は「姨捨山」に身を引き、将来のある子供や孫の生命（いのち）に変えた。そんな時代もあったが、それは貧困の極限の現象で、基本的には孔子の儒教の教えが社会の基盤にあった。年寄りや親は大切にされ、そうする子供を育てていた。家庭も社会も同じで、戦後の物の無い時代労使が一体になって、この国を作り上げた。「同じ釜の飯を食う」その無意識の意識が今日の世界に、互している日本経済がある。

職業の選択の自由の意識が、いつの間にか非正規労働者・派遣・社内失業者・過労・若者の自殺・追い出し部屋などの見出しが何時の間にか新聞紙上を賑わい出している。

少子化時代に若年労働者の不足を、後進国からの移民に頼る一方で、高学歴の若者が失職し、職業だけでなく住む所もない若手難民が、日比谷公園で寝泊りしている。政治家も景気回復には、企業の労働の活性化が必要との政策に力点を置いている。

この国はどちらの方向に向かっていくのであろう。「御祓い箱」だけでなく「お払い箱」の言葉も、明治期に捨てておくべきだった。

連載＝四国八十八ヵ所めぐり

「歩き遍路の旅」7

会員 樋口俊介

修業の道場（土佐の国） その3

24 番(最御崎寺)～39 番(延光寺) 合計 16 ヶ寺
(高知県)

海を眺め、空を仰ぎ、ひたすら前へ。
室戸・足摺の2つの岬を廻り、16 札所を
拝の旅へ、歩き遍路には遙かな道のりの
道場だ！！

23 番札所(薬王寺)に参拝したあとは、
およそ 80km かなたの室戸岬へと遍路の道
をたどることになる。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容
を分かる範囲で説明をします。必ず最後まで歩き
通します。

第19回

平成21年12月5日(土) 土佐藩、岡豊城下 を歩く(赤岡橋～30番善楽寺)

歩き(ウォーキング) 遍路 札所3ヶ所
約22km

28番(法界山) 大日寺

所在地＝高知県香南市野市町母代寺 476-1
電 話＝(0887)-56-0638

宗派＝真言宗智山派
開基＝行基
本尊＝大日如来

○天平年間に聖武天皇の勅願により建立された。
その後、大師がおとずれ、楠の大木に爪で薬

師如来を掘ったといわれている。これが「爪
堀薬師」と呼ばれる由来になり、目
鼻、口、耳などの病気に霊験があり信仰を集
めている。

◎大日如来について

真言密教の中心となる仏で、宇宙のすべて
の現象は大日如来の徳によるもので。他の仏
の徳も大日如来の一身に帰する。

29番(摩尼山) 国分寺

所在地＝高知県南国市国分 546

電 話＝(0888)-62-0055

宗派＝真言宗智山派
開基＝行基
本尊＝千手観音菩薩

○大師堂の横に「酒断ち地藏」が祭られている。
その昔、ひとつだけ願い事を叶えてくれるこ
とから「ひとこと地藏」と呼ばれていたが、
とある夫婦が夫の断酒を願ったことから、断
酒祈願に多くの人が訪れるようになった。

◎千手観音菩薩について

千手千眼観自在菩薩というのが正式な名前
で、それぞれの手に眼を持つ。さまざまな持
ち物を手にし世界の衆生を救済する。

30番(百々山) 善楽寺

所在地＝高知県高知市一宮しなね 2-23-11
電 話＝(088)-846-4141

宗派＝真言宗豊山派
開基＝弘法大師
本尊＝阿弥陀如来

○明治の廃仏毀釈により善楽寺は一時廃寺にな
り。その後、代行していた安楽寺が30番札所
となるが、のちに善楽寺が再興したことで30
番札所が2つ存在する事になった。そこで平成

6年に安楽寺を善楽寺の奥の院と定められた。

◎阿弥陀如来について

寿命無量、光明無限の仏。絶えることのない生命力と輝きをもつ。「南無阿弥陀仏」の念仏を唱える者をすべて極楽へ導く。

筆者紀行

5時に起床し5時50分に車で駐車場に、上道駅6時03分発の電車で岡山に、地下道を歩いて林原駐車場に6時20分に着き、バスに乗り換え6時50分に出発する。

なお当日の参加者は39名スタッフ3名運転手1名合計43名で倉敷経由し早島ICに入り、前回歩き終えた赤岡橋へ、前月はお参りの札所は無かったが、今回は3ヶ所のお参りが予定され楽しみもあり、忙しい一日になりそうです。

約4時間近く（途中の休憩を含む）走り、赤岡橋に10時15分に到着した。軽い運動をした後に、当日予定の説明を先達さんから受け、10時35分から歩き出す。28番大日寺へ向かう。参加者が多くスタッフは交通整理や、はみ出し防止等で大変のようです。



28番大日寺山門

少し雨が降って来たが日頃の皆さんの行ないが良いらしく、お蔭で雨はたいした事はなくて止む。しばらく歩くと大日寺の入口に到着した。本尊の大日如来は国の重要文化財に指定されているだが、秘仏で本日は拝観できなかった。

28番大日寺に11時25分に着き、清め準備を済ませ本堂と太師堂に、お参りをする。

バスで香美まで行きお店で昼食をして再度

28番大日寺まで帰り、13時頃から歩き出すも、29番札所まで約12kmあり途中で2回休憩等して、約2時間50分かけて16時頃に国分寺に到着する。足には豆もでき膝も痛むが周囲の方の励ましや応援が元気を取り戻しパワーを貰える、海の雄大さ波の音や自然の風を受け、歩くという行為は、人間に具わっている根っこの力を呼び覚ましてくれるようです。



29番国分寺へ遍路は続く

29番国分寺で清め準備を済ませ本堂と太師堂に、お参りをすませる。30番善楽寺に向け歩き出すも、時間的に日が沈み暗くなり、途中から懐中電灯を照らしながらの歩きは大変でした。17時25分頃に到着し、すぐにお参りをする、少し雨に遭う。17時を過ぎているので、線香とローソクでの参拝は出来ず、お札のみ納め心を込めてお参りをする。

17時55分に帰路へ、岡山駅には20時55分到着した。岡山発21時09分に乗り上道駅21時23分着き、家には21時40分に帰宅する。今日も無事で帰れて有難う！！

今日の歩数は（36,960）歩でした。
皆に感謝！！家族に感謝！！身体に感謝！！

第20回

平成22年1月16日（土）名利五台山へ登る （30番善楽寺～種崎）

歩き（ウォーキング）遍路 札所2ヶ所
約21km

31番（五台山）竹林寺

所在地＝高知県高知市五台山3577

電話＝（088）－882－3085

宗派＝真言宗智山派
開基＝行基
本尊＝文殊菩薩

- 神亀元年に聖武天皇の勅願により行基が開基。
古くから学山（学問寺）として信仰され、「南海第一道場」と呼ばれている。
禅僧である夢窓国師が造園した池泉観賞式の庭園は有名で、県内三名園に数えられるほど。

◎文殊菩薩について

獅子に乗る姿で釈迦如来の脇侍となる。
インドで生まれた、智者であり菩薩の域にまで達した。知恵をつかさどる菩薩。

3 2 番（八葉山） 禅師峰寺

所在地＝高知県南国市十市 3 0 8 4

電 話＝（0 8 8 8）－6 5－8 4 3 0

宗派＝真言宗豊山派
開基＝行基
本尊＝十一面観音菩薩

- 神亀年間に聖武天皇の勅願により行基が開基。
大同 2 年に大師が來錫し求聞持法を修めた。
その際に船舶の海上安全を祈願して十一面観音菩薩を安置。このことから「船魂観音」と呼ばれ、人々から信仰されている。

◎十一面観音菩薩について

観音菩薩は姿を変えて衆生の願いに答えてくれるという。多くの面は、救済の多様性を表している。

筆者紀行

5 時起床 5 時 5 0 分に車で駐車場に 6 時 0 3 分上道駅発で岡山駅へ。地下道を歩いて林原駐車場に 6 時 2 5 分に着き、バスに乗り換え後、6 時 4 5 分に出発し南国 S A に到着した。トイレ休憩等を挟んで前回歩き終えた善楽寺には 9 時 4 0 分に到着する。準備運動を

行い 9 時 5 5 分から歩き始める。

少し肌寒いが、直ぐに身体は温りいつもの様に、歩く楽しさと周囲の自然の環境、心なごむ田園風景等一身に受けながら歩ける事が、とても幸せに感じる思いです。

しばらく歩いていると「竹林寺 登り口」の看板があった。ここから竹林寺に登りケモノ道のような遍路道を登りきって、竹林寺に到着した。境内はとっても広く立派だ。

早速に気持ちを静めて本堂と大師堂に参拝し、先達さんと一緒に読経する。宝物館には重要文化財に指定されている素晴らしい仏像が、1 7 体も安置されているそうですが時間の関係で拝観できず。境内の庭園も凄く美しかったし、石仏も沢山あり五重塔が美しい。

わずかな時間でしたが庭園や石仏を観て回る、凄く感激し気分が穏やかになり落ち着きを取り戻した感じ。さあ次に向かって前進するとの気持ちが強く芽生える。



31 番竹林寺と美しい五重塔

バスで弘化台に行きそこで昼食（1 2 時 3 0 分～1 3 時 1 0 分）再度バスで竹林寺駐車場まで帰り、1 4 時少し前から 3 2 番禅師峰寺にと歩き始めるが、ずっと海岸沿いを歩いてきたが、大日寺の手前から遍路道は海を離れて、のどかな田園地帯が多くなり、気分的に安らぎ感が漂い元気がでるようです。

遍路道を登るが、思っていたより急な山道だ。3 2 番禅師峰寺は「峰山」という山の上にあることから、地元では「みねでら」や「みねじ」などの愛称で親しまれているお寺だそうです。

新たな気持ちで本堂と大師堂で参拝し、先達さんと一緒に心を込めて大きな声で読経する。あとは下山して本日の目標まで歩く予定です。

興味深かったのが、境内にあった奇岩・奇石。もとは海にあった岩や石が隆起した代物らしい。その内のひとつに「潮の干潮岩」は、岩の窪みに溜まった水が、今も潮の干満によって水位が変わるそうだ。こんな山の上なのに、今もどこかで海と繋がっているのだろうか？



32番禅師峰寺の奇岩奇石

この奇岩・奇石の岩と岩の間には「木枯らしに岩吹き尖る杉間かな」と松尾芭蕉の句碑もある。32番禅師峰寺は山の上にあるので、とても見晴らしが良く、土佐湾を一望でき気持ちよかった。しばらく壮大な景色を堪能し、急な山道を歩いた疲労も少しは和らいだ気がした。15時50分頃から下山するが登りよりも気を使う、何とか怪我なく、下りることが出来ました。約1時間15分かけて種崎まで歩き本日の目標地に17時05分に到着する。

17時10分にバスで岡山へ、我が家には21時25分に帰宅する。本日も特に怪我もなく無事に帰れました。

本日の歩数は（35.127）歩でした。
皆さんに感謝！！家族に感謝！！身体に感謝！！

第21回

平成22年02月06日（土）スリル満点！！
浦戸大橋を渡る（種崎～35番清滝寺）

歩き（ウォーキング）遍路 札所3ヶ所
約20km

33番（高福山）雪溪寺

所在地＝高知県高知市長浜857-3

電話＝（088）－837-2233

宗派＝臨済宗妙心寺派

開基＝弘法大師

本尊＝薬師如来

○延暦年間に大師によって開山されたといわれる。のちに寺は荒廃するが、長宗我部元親の依頼により月峰和尚が再興する。元親が亡くなった後は菩提寺となり、元親の法号、「雪溪恕三大禅定門」にちなんで雪溪寺とした。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

34番（本尾山）種間寺

所在地＝高知県高知市春野町秋山72

電話＝（088）－894-2234

宗派＝真言宗豊山派

開基＝弘法大師

本尊＝薬師如来

○大阪四天王寺建立のために、百済から来た工匠や仏師が、土佐沖で暴風雨に遭い、避難したのが種間寺近くの秋山港だったとか。そこで海上安全を祈願して刻んだ薬師如来を、のちに弘法大師が本尊とした。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

35番（医王山）清瀧寺

所在地＝高知県土佐市高岡町丁568－1

電話＝（0888）－52－0316

宗派＝真言宗豊山派

開基＝行基

本尊＝厄除薬師如来

○行基がこの地をおとずれて薬師如来を刻み、本堂として堂宇を建立し、「影山蜜院・釈本寺」と名づけたのが始まりといわれる。寺名は、大師が杖で地面をつつくと、清水が湧き出て滝になったという伝説が由来。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

筆者紀行

我家を6時頃に出発し、林原駐車場より6時36分に出発。前回に歩き終えた種崎に9時23分に到着する、身体をほぐし当日の説明等を受けて、9時35分から歩き始め約25分位で渡船の乗り場に着き、10分少々待って10時10分発の渡船に乗り、5分間の船旅を堪能しながら、10時15分に対岸の長浜で下船した。



33 番雪溪寺



34 番種間寺

33番雪溪寺に向け歩きだすも気温が低く手足が冷たい、約20分くらいで33番雪溪寺に着き、お参りし読経をすませる。雪溪寺の霊宝殿には運慶作等といわれる鎌倉期の仏像が、10体近く保管され拝観ができますが、今回は時間的に拝観出来ず次の機会に。34番へは11時20分頃から歩き出すも途中での昼食は弁当でした。おかずの種類が多く大変に美味しかった。

34番種間寺には13時30分頃に着く。山門は無く、入ってすぐに鐘楼、本坊、そして大師堂、一番奥に本堂があるという細長い境内が特徴。種間寺の薬師如来は旧国宝で、現在は重要文化財だそうです。歴史ある大変に貴重な仏像です。この薬師如来は、毎年旧暦の1月8日のみご開帳されます。別名「安産の薬師さん」とも呼ばれ、安産に御利益があるといわれている。



35番清瀧寺と天井の瀧

本堂と大師堂にお参りしてお願い事をお伝えし読経を全員で大きな声で唱えたあとで、次の35番へと向かう。沿道の人や近くの家、そしてすれ違いの方々から、熱い声援を戴き、何時もの事ながら感謝し元気が出ます。長い仁淀川を渡り暫く歩いて、くねくねとした細い道を登った山の上に、35番札所清瀧寺はある。16時10分に着き「戒壇めぐり」をしたあとにお参りする。

境内にはとても大きな薬師如来像が立っていて、台座も合わせると15mもの高さがあるそうです。台座の下は通路になっており、無料で入ることができる。この「戒壇めぐり」

は、厄除けのご利益がある。入ってみるも中は真っ暗で、さらに先に行くと、人が一人しか通れないほどの、通路が続いていたので、ビクビクしながら壁を伝って進んだ。しかし、あっという間に外にでてしまう。「え？もう終わり」と、少し物足りない感があつた。本当に厄除けになったのだろうか……。間違いなく厄よけになった気がする！！

気を引き締めて本堂と大師堂に参拝する。先達さんと一緒に、腹に力を入れて素直な心で読経を唱え、と、すごく気分が晴々として安らいだ。

16時40分に終わり、下りの細い石段を下りて、バスが待っている所まで約35分間歩き、その間に無人の農家直売店で名産のボンカンを買う。200円で6個もあり安く感謝する。一路岡山へ南国インターに入り、岡山駅には20時35分頃に到着した。本日も無事で帰れました。

なお本日の歩数は34,949歩でした。

みなさんに感謝！！家族に感謝！！自分の身体に感謝！！有難う！！

第22回

平成22年3月6日(土) 清滝さんから竜の道 を行く(35番清滝寺～36番青龍寺)

歩き(ウォーキング) 遍路 札所1ヶ所
約18km

36番(独鈷山) 青龍寺

所在地＝高知県土佐市宇佐町竜601

電話＝(0888)－56－3010

宗派＝真言宗豊山派

開基＝弘法大師

本尊＝波切不動明王

○本尊の波切不動明王は、大師が唐に留学中、暴風雨に遭いその際に風波を切って静めた不動明王を像に刻んだもの。そのため、船乗りや漁師からの信仰が深い。船の出る前に

は、乗組員一同が祈願に来ると言われる。

◎波切不動明王について

炎を背負い右手に剣を持ち、怒りの形相悪をこらしめる。仏道を全うして煩惱をもう砕く。大日如来の使者である。

筆者紀行

岡山を6時46分に発車し倉敷経由して早島ICに入り前日に歩き終えた所へ。今日は参加者が38名、スタッフ3名、運転手1名で合計42名です。土佐市内のバス停に9時55分到着。軽い運動をして10時05分から歩き始め、約2時間くらい歩く、あとはバスで宇佐町まで移動し、お店で昼食をすませる。再度元のところに帰り、13時40分から午後の遍路道を開始。宇佐大橋を渡るが大勢(41名)が並んで歩く姿は壮観です。

しばらく歩くと急に道が狭くなるが、階段を少し上ると山門があり、その先に170段の急な階段が続いていた。36番青龍寺には14時35分に到着する。



36番青龍寺と不動明王

この階段は元横綱・朝青龍関が、高校時代に鍛錬の場としたらしい。たしかに登り下りをすると息が切れ、よい鍛錬になりそうだ。なお四股名も寺名が由来とか。小耳に挟む。

朱色が鮮やかな三重塔が、石段の途中に建てられている。そしてさらに階段を上った高台に大師堂、本堂、薬師堂が横一直線に並んでいる。

この配置は、唐の青龍寺を模しているとのこと。本尊は重要文化財の波切不動明王で、とても立派なお寺で満足しました。本堂、大

師堂にて参拝し、先達さんと一同で大きな声で、気持ちを込めて読経を唱える。特に今日は無心に近い境地に成れた気がした。

宇佐大橋まで帰り、さらに本日の目標地の浦の内まで歩く。バスに乗り16時25分に帰路に着く。本日も無事に帰れて有難う！！気分爽快、そして家族に感謝！！

なお本日の歩数は29. 275歩でした。

第23回

平第成22年4月5日(月)横浪三里を西へ行く(宇佐大橋～押岡)

歩き(ウォーキング)遍路 札所0ヶ所
約19km

筆者紀行

岡山をバスで6時45分に出発する、参加者はスタッフ等を含め総数40名。土佐ICで降りて、高知県水産試験場には10時05分に到着し、歩き始めるが次の37番岩本寺までは約50kmもある。気分は重い、しかし気持ちを引き締めて、県道23号を出発する。40名も縦に長く歩くので交通整理が大変です、スタッフの皆さん有難う！約2時間ちかくで浦の内に着き、すぐにバスで土佐まで行き名物のカツオのタタキで昼食を摂る。

再度バスで浦の内に戻り、13時10分から歩く。四国を歩いて感じるのは、人と自然の雄大さ、豊かさです。海の幸だけでなく、川にも土にも、たくさんの恵みがありました。今日の目的地の押岡に16時35分に到着する。

バスに乗り帰路岡山へ、我が家には21時15分に帰宅する。

本日も無事で帰れて、皆さんに感謝！！家族に感謝！！身体に感謝！！風呂に入り身体の疲れを癒す。

なお本日の歩数は28. 968歩でした。

第24回

平第成22年5月10日(月)須崎からかつおの漁港へ歩く(押岡～久礼)

歩き(ウォーキング)遍路 札所0ヶ所
約20km

筆者紀行

林原駐車場に6時25分に着きバスに乗り換え6時46分に出発する、今日の参加者は35名であった。乗ってすぐに約10分間くらい雨が降り出す。須崎東ICで下り前回歩き終えた押岡に10時06分に到着。軽い体操をした後に、10時25分から歩き出す。

高知では激しく降らず小雨のなか番外(大善寺)まで歩きお参りを済ませた後に、道の駅「カワウソの里すさき」まで歩く、そこで昼食をする。



さくら川沿の満開の桜路

12時25分から歩き出し国道56号線を通り遍路道に入る。アップダウンの激しい厳しい焼坂峠(228m)を休憩しながら、どうにか越えて、安和を通り抜け今日の目的地である久礼まで歩き16時45分に到着。

バスで岡山に20時50分到着し、友人の車に同乗し我が家に帰宅する。足には豆が2つも出来て、ひざも痛むが気分は気持ちよく、達成感が漂うような感じ、今日も一日無事で帰れて有難う！感謝感激です。

皆さんに感謝！家族に感謝！身体に感謝！

なお本日の歩数は34. 762歩でした。

編者より この続きは次号をお楽しみ下さい。

成願寺の由来

住職 甘露裕昭

成願寺は元、岡山市（旧邑久郡）邑久郷吉塔にあり。仁明天皇代（837）の承和の慈覚大師（天台座主三代圓仁）の開基によるもので、その頃は「四王山天楽寺」と称し、天子の尊崇あるとも言えども、寛徳元年（1044）落雷により焼失せり。降（くだ）って建長元年（1249）寂室上人によって、本尊を修治し、大法会を行へり。ことによせていえば、山門の横にある「大界外相」の石碑は寂室筆のもので『皇室下馬車』という意をもつものなり。

降って正慶元年（1331）3月後醍醐院の隠岐の島へ遠流された時、明範上人（佐々木長範の子息）が衆僧と共に、慨嘆の児島三郎高德一族五十三人は、七昼夜、衆僧等と大衆若経を転読し、還幸のための願書を納めたり。

その後帝宝位に復されしをもって、明範上人は、洛中（帝）の本寺、廬山寺（ろざん）、天台講寺（内務省直轄）の同時三世、明導上人（帝の甥、閑院一品尹宮、六條内大臣、有房公の六男）に見え、児島の縁由を奏上し、この時をもって、寺名、改まり、勅願により「祈祷山成願寺」と称し、寺領三十五石を賜る。

更に時を経て、天文11年（1542）寺領百石を有するも、兵火によって、寺領百石は没収され、寺宝も盗掠に遭うも、永範上人は作州苦東郡貴富村に本尊を勧請せり。然るに檀中、尾崎長兵衛氏は、再興の意志を秘め、落髪し、廬山寺第二十世泰空上人に見え、思願の旨を話せり。その後現在地に廬山寺の働きかけにより、松平伊豫守綱政公をもって勧募により再興に及べり。

その後時を経て、永禄三年（1689）覚誉上人の代、弟子玄祖は密乗に優れ、続く早魃に対し請雨の靈験をもって、池田氏参議輝政により、山林・田圃・白田二反を下附され、内

一反は神崎宮（牛頭大王）に分施せり。

時を経て、天保13年（1842）9月山門の左にある門番所の失火により、庫裏、客殿の類焼に及べり。その庫裏についていえば、その後某庄屋（旧村長）の中古建物（60～70年前）を委譲されしものにして、概算すると、214年のものであります。

時を経て、昭和25年4月、屋根の葺き替えの他、老朽の柱の取替え、引続き山門、鐘楼堂（建武2年児島三郎高德の寄進）等の屋根の葺き替えをなすも、古瓦使用のため、その間屋根屋さんに修理依頼をした。ちなみに申し上げると、成願寺には後醍醐天皇の勅願所として、後醍醐天皇及び閑院宮家のご尊牌を奉祀する他に、国宝級のものとして、仏説阿弥陀経（後陽成院筆）祈祷山成願寺縁起書（清水大納言梶井宮筆）後水尾天皇、後光厳天皇、皇后（崇賢門院）その他、ご皇族に関する宸翰をはじめ、写経、詩歌等の寺宝があります。

お寺の所在地:704-8138 岡山市東区神崎町 508

お寺の正式名称:祈祷山 成願寺

この由来書は2月11日の先史古代研究会の探訪会で訪問した折に、住職さんの手書き文書を頂きました。参加者の皆さんに配布できませんでしたが、“きび考”に掲載させていただきます。16名の訪問に丁寧な接待をしていただき、お話も戴きました。御礼申し上げます。 編者より

撮要録・平凡社の『岡山県の地名』 丸谷追記

「成願寺はかつて邑久郷吉塔にあり、寺領100石を有したが宇喜多直家に寺地を没収された。この時、住僧は当地に退転、不動院・薬師院の二カ院を興した。両院は寛文年中（1661～73年）相次いで廃寺となった。元禄二年（1689年）本寺であった廬山寺（京都市上京区寺町通り広小路上る北之辺町397）の働きかけで、両院の寺跡に再興かなった。」と記録されています。 ※ 廬山寺とは現在の天台圓淨宗大本山 廬山寺です。 源氏物語執筆地です。

例会報告

第4回 11月例会

開催日 平成25年11月19日(火)
場 所 ゆうあいセンター2階
時 間 13:00~16:30
テーマ 『芥子山界限 方位や史跡』
講 師 尾高庸子会員

古代の方位などに詳しい尾高講師は芥子山の麓で調査研究をなさっています。豊富な資料を駆使しながらの解説で、笑顔の中に凜とした自説に感動して聞き入りました。もう一度聞きたいお話でした。

第5回 2月例会(探訪会)

開催日 平成25年11月19日(火)
場 所 吉井川右岸南部地区と宝伝

記紀にて馴染みの『児島の高島』第三弾として、邑久・牛窓に展開する＝吉備の高島を探訪しました。郷土史家の岡崎春樹(会員)氏が刊行された『吉備に邪馬台国』のご本を戴き、それを元に案内いただきました。

当日は安仁神社の神事が宝伝の旧海水浴場で行なわれ、参観する貴重な体験もできました。来年は三幡の高島を訪問する予定です。渡船の都合を検討中です。

編集後記

平成25年度は5回の例会を開催し、“きび考”は8号と9号を発行しました。5月例会では「製鉄」がテーマで福留会員のJFF制作のビデオが印象的で、7月例会は風水の話を書いた矢吹さんに、9月例会は樋口・中島さんの歩きと自転車の遍路の話でした。11月は尾高庸子氏の身近な芥子山界限の方位の話で盛り上がりました。最後に2月11日は建国の日に因み、記紀の児島高島伝説の残る邑久界限を、岡崎春樹氏の出版記念をかねて案内して戴きました。

報告者の皆様そして多くの参加者の皆様にお礼を申し上げます。

26年度も例会(5回程度)を中心に、“きび考”を2回発行の予定です。多くの皆様の寄稿をお願いします。 編者より

“きび考” 第9号

2014(平成26)年3月31日発行

発行 先史古代研究会 会長 丸谷憲二
事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1
山崎泰二方
電話=086-276-6654 FAX=086-276-2241
メール=senshi@bosaisystem.co.jp(事務局専用)
編集委員 山崎泰二(事務局長兼編集委員長)
井上秀男 延原勝志 樋口俊介
濱手英之 丸谷憲二